



若年皆のんさの 抒情詩 爲めに生れたる

忽再版

民話ば 衆文藝 たり

野口雨情 民謠集

別後

第三編

○野口雨情先生が現詩壇に於ける民謠詩人の第一人者で有ることは今更ら知らぬ者も無いでせうが殊に此處に選んだ作品の中には素朴純情の裡に艶麗優和なること宛も月下に伶人の竹笛を聴くが如く一讀何人も恍惚たらざるものなしとの高評です。是非本書を櫻桃の蔭に繙かれて、現詩壇獨歩の民謠詩人が唄はれし無限の情緒を偲ばれむことを御薦め致します(内容、本居長世先生の作曲あり)

西條八十先生 靜かなる眉
水谷勝先生 寶石の夢

袖珍箱入天金類美本全一冊 實價金九十錢 送料五錢
袖珍箱入天金類美本全一冊 實價金九十錢 送料五錢

尙文堂

東京市神田區南保町四番

發行所

▽皆様の御希望によりて出版され、忽ち白熱の好評を博したるは

ミナサンノ
オツカヒニ
ナルロクハ
シロキヤニ
ソロエテ
アリマス



△

白木屋吳服店

袖珍箱入類美本上製 實價金九十錢 送料五錢

信 用 あ る 此 マ ク

蓄音器とレコードは



ニッポノホン
驚印を御選びあれ

▲金の船童謡のレコードもあります

目録月報
無代通呈

面白三月賣出 新譜

義太夫	磯太	小唄	童話劇	書生節	尺八二部	長唄	浪花節	ハモニカ	常磐津
十(二枚)	古坂太夫	水戸金太	根岸歌劇團	市川曉保	本居長世	芳村孝次郎	京山小圓	高橋湘翠	松尾太夫
磯の	鶯	江のさ	節巻	節巻	鳥	門	河内山、宇治川先陣	セビラの理髮師	(全部ノ内二枚)
磯の	鶯	江のさ	節巻	節巻	鳥	門	河内山、宇治川先陣	セビラの理髮師	(全部ノ内二枚)

株式会社 日本蓄音器商會
販賣部 東京京橋銀座一丁目
大阪東區南久寶寺町四丁目

當社の特約店全到る所にあり

大懸賞讀者文藝募集

童話 童謡 綴方 幼年詩 自由畫

締切四月二十日限り(悉しくは本誌八十七頁にあり)

目次

春の唄 (表紙、石版刷) 岡本 歸一
 天落桃 (口繪、原色版) 岡本 歸一
 鼬と雀 (雀山譜) 一 本居長世
 鼬と雀 (雀山譜) 二 野口雨情
 人間のいのち (日本神話) 四 楠山正雄
 怪鳥退治 (繪ばなし) 三 岡本 歸一
 鏡國めぐり (長篇童話) 六 西條八十
 たんぼ (童話) 六 若山 牧水
 狸々長者 (童話) 六 沖野岩三郎
 支那伊蘇普物語 (童話) 六 楠山正雄
 奇術師 (童話) 六 宮島 資夫



Riches

悪龍の閉口 (童話) 三 藤澤衛彦
 白狐の怨 (童話) 三 馬場孤蝶
 歸る雁 (童話) 三 霜田史光
 欲張り者の大損 (童話) 三 野口雨情
 鬼鳥の笛 (推薦童話) 四 齋藤佐次郎
 とろ、薯 (推薦童話) 四 大和 左止男
 冬 (自由選) 四 望長 岡 襄
 た宮 (自由選) 四 山 本 鼎選
 宮 (自由選) 四 野口 雨情選
 雲 (自由選) 四 編 輯 部選
 通 (自由選) 四 若山 牧水選
 信 (自由選) 四

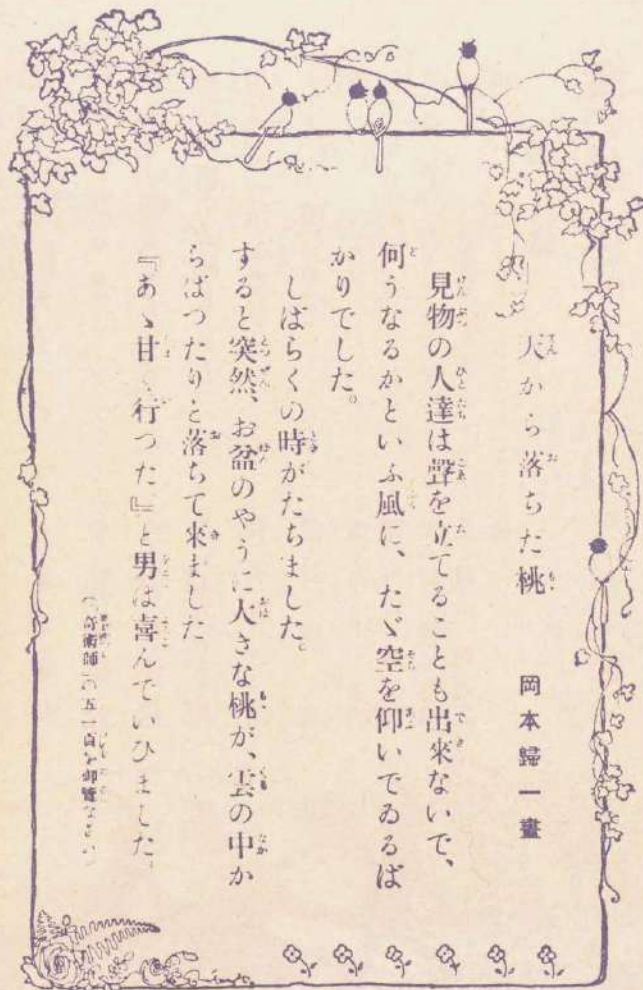
金の船童話カード 岡本 歸一

附録





Rieku



天から落ちた桃

岡本歸一畫

見物の人達は聲を立てることも出来ないで、何うなるかといふ風に、たゞ空を仰いでゐるばかりでした。

しばらくの時間がたちました。

すると突然、お盆のやうに大きな桃が、雲の中からぱつたりと落ちて來ました。

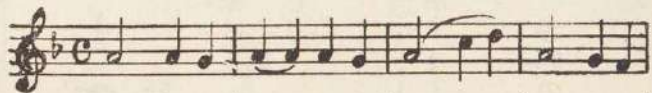
「あゝ甘々、行つた」と男は喜んでいきました。

（高橋師の五一頁の御覽のこと）

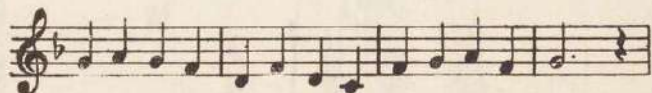


蝟ねずみ と 雀すずめ

本居長世作曲



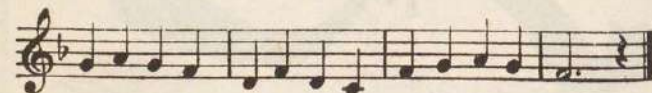
3-3 2 | 3 3 3 2 | 3-5 6 | 3-2 1 |
 コ ノ ウーチハ ヒー コシテ
 こ の うーちは ひー こして



2 3 2 1 | 6 1 6 5 | 1 2 3 1 | 2-0 |
 アマダガ シマツテ ラリマシタ
 あまごが しまつて をりました



3 3 3 2 | 3 3 3 2 | 3-5 6 | 3-2 1 |
 オニハノ オニハノ マー ナカニ
 おにはの おにはの きーの うへに



2 3 2 1 | 6 1 6 5 | 1 2 3 2 | 1-0 ||
 イタチガ アソンデ ラリマレタ
 すずめが あそんで をりました



この家は
引越して
雨戸が
締つて居りました
お庭の
お庭の
木の上に
雀が遊んで居りました



鴝と雀

野口雨情

この家は
引越して
雨戸が
締つて居りました
お庭の
お庭の
真中に
鴝が遊んで居りました





人間のいのち (日本神話)

楠山正雄

一、死んで行く國

て火の神を生んで大火傷をなすつた伊弉冉の女神は、死んでから、夜見の國といつて、地の下のまつくらな國へ行つておしまひになりました。

男神の伊弉諾の命はいつまでも女神のことがお忘れになれないで、明けても暮れてもその事ばかり考へて、嘆いていらつしやいましてが、とうとうがまんができなくて、はるく夜見の國まで女神のお後をしたつてお出でになりました。

男神はやがて夜見の國へお着きになりましたが、夜も晝も同じやうな國ですからまつくらでも何も見えません。やうく女神のいらつ

しやる御殿をたづね當てますと、はつと思をのつくひまもなく、戀しい女神の名をお呼びになりました。そのなつかしいお聲をお聞きつけになると、女神はお部屋の上げ戸を少しおあげになつて、「まあ伊弉諾の命さまですか。どうしてこんなところへいらつしやいました。」

と、びつくりした聲で仰しやいました。男神の方でも、女神の昔にかはらないお聲をきくと、大へんうれしくお思ひになつて、

「あゝ、わたしはどの位あなたを戀しいと思つたか知れない。あなたと二人であんなに苦勞してこしらへた國が、もう少しででき上がらうといふ時に、急にこんな所へ來ることになつて、あなたもさぞ残念だらう。だからもう一度還らうよ。さあ早く還らうよ。」

と、おせき立てになりました。

「さうですか。それは惜しいことをしました。」と女神はおいひになりました。「あなたが來て下さると知つたら、わたくしは夜見の國の食物をたべる

のではありませんでしたが、いらつしやり方がお遅いので、わたくしはもう死人の穢れがからだについてしまひました。けれどせつかく來て下さつたのですから、明日の朝になつたら夜見の國の神

たちに何とか話をして、還してもらふやうに頼んで見ませう。今夜は遅くなりましたからわたくしは休みます。あなたもそこへ休んでお待ち遊ばせ。ですが夜中にわたくしの部屋をあけて御らんになつてはいけません。きつとでござりますよ。」

と念を押して、女神はお入りになりました。けれども「待つ」といふものはよけい待ち遠しいものです。「見るな」といふものはよけい見たいものです。伊弉諾の神さまはじめはおとなしく

待つていらつしやいましたが、あんまり長いのでがまんがでさなく
なつて、一體女神はどんな容子をしてゐるのか見てやらうと思ひ
になりました。

そこで角髪といつて、頭の髪をまん中で分けて、兩方の耳の上で結
んだその左の鬢に挿した長い櫛をぬいて、その親齒を一本おかき
なり、これに火を點して、女神の部屋へ入つて御覽になりますと、
まあどうでせう。女神のあれほど白い、きれいな肌は見るかげもな
くどろ／＼に崩れて、くさい蛆がわいてゐました。

その上、女神の頭には大雷、胸には火の雷、お腹には黒雷、お臍
には裂雷、左の手には若雷、右の手には土雷、左の足には鳴雷、
右の足には伏雷と、都合八つの雷神が廻つてゐて、こはい眼で睨
みつけました。

伊弉諾の神はびつくりして、

「あッ。」

と仰しやつたまへ、後をも見ずにはふ／＼逃げ出しておいでになり
ました。

するとその時くら囁の中から女神がうめしさうなお聲で、
「あれほど申し上げたのに、わたくしに恥をおか／＼せになりました
ね。何といふひどい方でせう。」

と、お叫びになりました。

「伊弉諾の神さまはかまはずどん／＼逃げておいでになりますと、
後から大勢女の聲で、

「伊弉諾の命さま、逃げてもだめですよ。」

と、いひながら、黄泉醜女といつて、おそろしい顔をした夜見の國
の女の鬼たちが、負けずにとん／＼あとから追つかけて來ます。

「その時、男神は頭の飾にさした黒い葛の葉をむしりとつて、

「實い成れ、實い成れ。」

と、いひながら、地びたへはふると、葛の葉は見る／＼葡萄の樹に
なつて、露のしたゝるやうな實がふさ／＼と生りました。

女の鬼どもはこれを見ると、神を追ふことは忘れて、われがらに
駆けよつて葡萄の實をいでは食べ、もいでは食べしてゐます。神
はこの間にどん／＼走つておいでになりました。



葡萄の實をみんなとつて食べてしまふと、醜女どもはまた、「忘れた、忘れた、おう、おう。」

と、いひながら、追つかけて来ました。

神は此度は右の角髪にさしていらした長い櫛をおぬきになり、一本々々歯を欠いては、

「竹の子生れ、竹の子生れ。」

と、いひく、地びたにはふると、見事な竹の子が一本々々、によさりくくと出て来ました。

醜女どもはこれを見ると、また追ふことは忘れて、我れがちに駆けよつて、竹の子をぬいてはかじりはじめました。この間に、神はどんく逃げておいでになりました。

神も此度こそは大丈夫と、ほつと一息入れかけて、ふとうしろを振向くと、おやく、さつき伊弉冉の女神の體にたかつてゐた八人の雷神を大將にして、千五百人の鬼の軍勢が、わんわんいひながら駆足で追つかけて来ました。

神は髪飾も櫛もみんなはふり出しておしまひになつたので、

とうとう一帯をぬいて、うしろの岩へ向けてめちやくやくに斬りつけ、一生けんめい逃げておいでになつて、やうやく夜見の國と人間の世界との境にある黄泉平坂といふ坂の下まで追ひつ追はれつ逃げておいでになりました。

その坂の下に一本の大きな桃の樹がありました。神がやつとこの樹の上におかくれになると夜見の國の追手はもう間近くおしよせて来ました。

神は桃の實をもいで、三つまでつゞけて鬼の軍勢のまん中を目がけてぶつゝけました。鬼の軍勢はこれで閉口して逃げ出してしまひました。

「桃よ、有りがたうよ。これから後も、わたしの可愛い日本の國の民が難儀に逢つた時、誰によらず、助けてやつておくれ。」と、仰しやつて、桃に大神實命といふ名をおやりになりました。

また桃の實をぶつゝけて悪い鬼を追ふことはこれからはじまつたといひます。



二、生と死

とうく一ばんおしまひに、伊弉冉の女神が御自分で追っかけておいでになりました。この時男神は黄泉平坂の真中に千引の石といふ大石を仕切りに置いて道をふさぎこの石の彼方と此方に男神と女神とは向ひ合つて、お立ちになりました。男神はその時、

「ではこれで永いお別れだ。」
と、お言渡しになりました。

女神はうらめしきうに、

「まあ、あなた、そんな人情のないことを仰しやるならよろしうございます。これから日本の國におなたのお生みになる人間を毎日千人づつしめ殺してやりますから。」
と、仰しやいました。

すると男神もまげずに、

「おやくお前、そんないちのわるいことをするならば、

わたしも日本の國に、毎日千五百人づつ子供を生まさせていただきます。」

と、お答へになりました。

それからは日本の國に人間が毎日千人づつ死んで、千五百人づつ生れるやうになりました。

また伊弉冉の女神は、永く夜見の國に止まつて、人間の死を司る神様になりました

さて伊弉諾の神はまた明るい世界におかへりになりましたと、近江の國の多賀といふ所にお隠れになつて、永く日本の國を護る神様におなりになりました。

なほまたこの神が夜見の國からお歸りになつた時、死人の國の汚れのついたことを大そうお嫌ひになつて日向の國の檍原といふ所の川で體をお洗ひになりましたが、その時左のお目を洗ふと日の神が、右のお目を洗ふと月の神が、一ばんおしまひにお鼻を洗ふと、素盞雄の神がお生れになつたといふお話も傳はつてをります。(つづく)





大冒険「怪鳥退治」

岡本 歸一

モリス・ターナー氏監督
ウイリアム・ダンカン氏主演

活動好きの正夫さんと春雄さん、この廣告を見たのでたまらない。

一生懸命おねだりして、其晩二人で見に行きました。

正夫「實に耐らないね。」

春雄「素敵だね、とても耐らないね。」

怪鳥の留守に卵を取りに壱を降りて行くところで、二人共すつかり感心してしまひました。

2

春雄「君、僕昨晚夢にまで見たせ。もう少しと云ふ所で綱が切れてはつと思つたら目が醒めちやつた。」

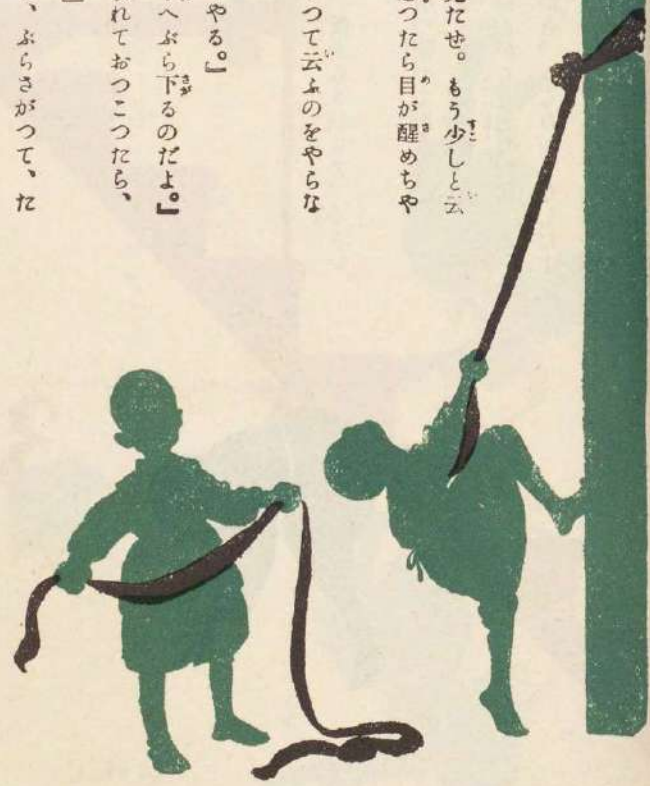
正夫「僕達も、大冒険卵とりつて云ふのをやらなにか。」

春雄「大賛成だね、どうしてやる。」

正夫「帯でこの梯子段から下へぶら下るのだよ。」

春雄「切れやしないかい。切れておつこつたら、こんだほんとにいたいせ。」

正夫「この柱へゆはへつけて、ぶらさがつて、ためて見よう。」





春雄「大丈夫だ、やらう〜。僕ぶらさがらア、小さいから。」

正夫「よし、それちや僕上で引つ張つて居らア。」

春雄「君、本統にしつかりおさへて、呉れ給へ。」

正夫「僕の腰へも結へつけておくから大丈夫だよ。若しおつこつても二人ともおつこちるから、うらみつこなしたよ。」

春雄「なんだかこはいな。」

正夫「又弱音をふき出す、君少し弱蟲だな。」

春雄「やるよ〜、ちや、しつかりたのむよ。」

3



4

正夫「まだとどかないかい。」

春雄「もう少し、もう少し。」

正夫「手がびり〜して来た。」

春雄「はなしちやいやだよ、僕だつて随分苦しいせ。」

正夫「もう、とても我慢出来ない、早く上つて呉れ給へ。」

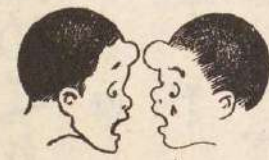
春雄さんおどろいて、上らうとして、もがいたので、

正夫「だめだよ〜、あばれちや。あいたい、いたい。」

どつたん

正夫「御免よ、君、はねるんだもの。」

春雄「ゆんべの夢は正夢だ。」



りわお

鏡國めぐり (長篇童話)

西條 八十

五、早く！ 早く！

「お前はいつたいどこから来たんです？　そしてまたこれから何處へ行かうと思つてゐるんです。え？　顔をあげてチャンとお話なさい。さう年中指ばかりいちくりまはしてゐるもんぢやありません。」
 スベイトの女王は、あやちやんを見ると口早にかう言ひました。あやちやんは云はれた通りの姿勢をとつて、實は路がわからなくなつたのだと出来るだけくはしく説明しました。
 「ナニ路がわからない？　そんなはずはありません。この邊の路はみんなわたしのものだからどれもちや



んとよく分つてゐます。——だがどうしてお前はこんなところへ来たのだえ？」と、女王はすこし言葉を優しくして、

「さ、お辭儀をなさい。何か考へてゐる暇が有つたらお辭儀をするものです。さうすれば餘程時間がはぶけます。」

あやちやんは女王の云ふことが一々どうも妙ちきりんに思はれましたが、その威勢にうたれて、なるほどさうなのかとも考へて、ていねいに一つお辭儀をしました。

「さあ、もう返事をする時間だよ。」と、女王は時計を出して見ながら云つて、

「ものを云ふ時にはもすこし口を大きく明いて、そして口を利くたんびにいつも「陛下」といふんだよ。」
 「あたしはたゞお庭がどんな工合だか見たいと思つたんです。陛下——」

「それでよろしい。と女王は云つて、あやちやんの頭をピシヤ／＼とぶちました。これはあやちやんにはあんまり嬉しくありませんでした。女王はそれから言葉をつゞけて、
 「お前はお庭だなんて云ふけれど、わたしの眼から見ればこゝはたゞの原つばさ。」と、云ひました。

あやちやんは別に女王のこの言葉に逆はうとは思はなかつたので、すぐあとをつゞけて、

「それからあたしやつとのことであのお山のてつべんへ行ける路をみつけたと思ふと……」と、云ひかけますと、女王は途中で口を入れて、

「お前はまたあれをお山だなんて云ふけれど、わたしの眼から見ればあれは谷をこさ。」

「いゝえ、ちがひます。お山が谷をこだなんてそんなことはありません。それはでたらめです。——」
 あやちやんは思はずかう云つた後で、フト自分が

たうとう女王に逆つたことに気がついておどろきました。

スベイトの女王はむづかしく頭を掉つて、「お前はでたらめだとも何とでも云ふがい。わたしの辭引にはチャンと谷そこ書いてあるのだから。」

あやちやんは女王のご機嫌が少々わるくなつた様子なので、あわてゝもう一べん敬禮をしました。それから後、二人は黙つたなりで山のでつべんまでのほりつめました。

しばらくの間、あやちやんはそこから四方八方を見わたして立つてゐました。遠く／＼山が聳え、川が流れ、森がかたまつてゐて、何とも云へない美しい國でした。

「あゝうれしい。これから山を下りて、あの路を通つて、そこからあの川のそばの路へ出て、――ま



あ、その途中にどんなに珍らしいところがあるでせう！」

あやちやんは思はず口に出してかう叫びました。と、ちやうどその瞬間に、どう云ふわけだか知りませんが、二人は駈けだしました。

あやちやんはその時のことをあとでいくら考へてみても、一體何のはづみで駈け出したんだかわかりませんでした。たゞおぼえてゐることは二人が手をとりに合つてムチャクチャに速く駈けてゐたことでした。わけても女王の足の速いことゝ云つたら、あやちやんがやつとこさとくつゝいて行かれるほどでした。それでもまだ女王は、

「もつと早く、もつと早く。」ととなり續けてゐました。

「もうこれより早くは駈けられません。」と、あやちやんは云はうとひましたが、息がきかれてこれさへ

云へませんでした。

ところで、何よりも奇妙なのはいつまで駈けてもあたりの樹やそのほかいろ／＼のものもがもの通りのまゝであることでした。どんなに早く駈けても、何一つ通り越した様子が見えないのです。

「みんながあたしと一緒に駈けてゐるんぢやないかしら。」あやちやんはひどく怪訝におもひました。すると女王はあやちやんの考へてゐることを悟つたやうに、

「口をきくんぢやないよ。もつと早く！ もつと早く！」と、どなるのでした。

口をきくどころか、あやちやんはもう息がきかれて、息がきかれて、この分ではもう生涯口がきけなくなるのぢやないかと想ふほどでした。それでも女王はまだグイ／＼手を引っぱりながら、

「もつと早く！ もつと早く！」と、となりつゞけ

てゐます。

「もう直きですか。」と、あやちゃんはあへぎ／＼やつと訊きました。

「ナニ、もう直きかつて！」と、女王は口真似して、「そんなところもうとうの昔に通り越しちやつたんだよ。だからもつと早く！ 早く！」

それなり二人はなほしばらく黙つて駈けつゞけました。風はあやちゃんの耳もとでビュー／＼鳴り、髪の毛を一本残らずもぎ取つてしまふのではないかとさへ想はれました。まふで宙を飛んでゐるやうに、ほとんど足を地べたへつけず、駈けて駈けぬいて、あやちゃんがもうヘト／＼にくたびれ切つて仆れさうになつた時、二人はフト立ちどまりました。あやちゃんは地べたにベタリと坐つたなり、しばらくは眼がクラ／＼まはつて何にも見えませんでした。

けてゐれば、キツトどこかはかのところへ行かれるんですのに。」

「それはのろ／＼した國のことさ。」と、女王は云つて、「この國ではね、いまぐらゐ駈けたゞけでは、やつとおんなじ所にしきや居られないんだよ。もしほかの所へ行かうとするなら、せめて今駈けた倍ぐらゐ早く永く駈けなければだめだよ。」

「ではもうほかの所へは行かないことにしませう。」と、あやちゃんはガツカリして云つて、

「あたしはもうこゝに居ればたくさんですわ。——たゞどうも熱くつて、喉がかわいてたまらないんです。」

「ではいゝ物をあげよう。」と女王は親切に云つて、かくしから小さな箱を出して、

「さ、ビスケットをおあがり。」

喉がカラ／＼に乾いてゐるのに、ビスケットなん

六、へんな汽車

女王はあやちゃんを優しく抱き起して、一本の樹の下へ立たせてから、やさしく云ひました。

「さあ、すこし休んでもいゝよ。」

あやちゃんはあたりを見まはして、二度びつくりしました。

「アラ、あたしたちはさつきからこの樹の下に居たやうですわ。何もかもとの通りですもの。」

「さうさ、あたりまへさ。」

と、女王は澄まして返事して、

「それがどうしたと云ふんだえ？」

「でもあたしたちの國では——」

と、あやちゃんは、まだせい／＼息をきらしながら、

「あたしたちの國では今ぐらゐ早く、そして永く駈か、あやちゃんはちつとも欲しくありませんでした。けれども斷つてはまた禮儀に外れると思つて、一生けんめい口に頬ばりました。」

口のなかでカラ／＼になつてゐるところへ、カラカラに乾いたビスケットを詰め込んだものですから、喉につかへて、あやちゃんは眼を白黒させてゐました。

「どうだね。それで元氣がついたらうね。」

女王は訊ねました。あやちゃんは口をモガ／＼させるだけで、返事が出来ませんでした。

「どうだね、すつかり渴きがとまつたらう？」と、女王はもう一べん訊きました。あやちゃんはちやうどビスケットが喉を通るときで、まだ返事が出来ませんでした。やつとグイと一呑みしてから、

「ハイ」と、勢よく返事をして、あやちゃんが後をふり向きますと、どうでせう、スベイトの女王はど

こへ行つたものか、影も形も見えませんでした、さうしていつの間にか自分は汽車の中らしい腰かけの上へかけてゐるのです。

「切符を拜見いたします。」と、車掌が窓から首を突込んで云ひました。あやちゃんの右左に掛けてゐたお客はみんな揃つて直ぐに切符を出しました。

「娘ッ子、お前も切符を出しな！」

車掌はあやちゃんの顔を見て怒つたやうな聲でかう云ひました。と、その後について大勢の聲で、まるで合唱でもするやうに一緒になつて云ひました。

「娘ッ子、車掌さんを待たせると云ふ法があるか！あの人の時間は一分一厘もするのだよ。」

「あらあたし切符が無いやうですわ。」と、あやちゃんはビク／＼しながら云つて、

「だつて、あたしの来る途中何處にも切符の賣場なんか無かつたんですもの。」



「この子は汽車をまちがへてゐるのだ。」と云つてボタンと窓をしめて行つてしまひました。

「なんぼ子供でも、——たとひ自分の名前は知らん

「あの娘の来るみちには切符の賣場が無かつたんだとよ。なにしろあすこの地面は一寸一厘もするからな！」と、大勢の合唱がまた始りました。

「云ひわけをしたつて、だめだよ。運転手のところへ行つて切符を買つておいで！」

車掌はやつぱり怒つた顔であやちゃんに云ひました。すると又してもその聲の後から、みんなの合唱がはじまりました。

「運転手つてのは、機關を動かす人だよ。なにしろ一度煙をだすだけで一萬圓するのだからね。」

「すゐぶんうるさい汽車なこと！」

あやちゃんは一々合唱が始るので、たまらず兩手で耳をおさへました。

車掌ははじめに望遠鏡を出して、その次に顯微鏡を、おしまひには顯微鏡を、順々に出してあやちゃんの顔をこまかくしらべました。さうしてあげくに、

でも、行くさき必得んと云ふ法はない。と、あやちゃんの眞向ひに腰かけてゐた紳士が云ひました。

その紳士は淺草紙で出来た洋服を着てゐました。

紙の服を着た紳士の隣にゐたのは一疋の羊でしたが、眼をつぶつたなり、聞えよがしに云ひました。

「なんぼ子供でも、——たとひイロハは讀めずとも、切符の賣場へゆく路ぐらゐ知らんといふ法は無い。」

羊のお隣には甲蟲が坐つてゐました。(なんだかギツシリ妙なお客ばかり詰つてゐる車でした)それでお客は順々にものを云はなければならぬ規則になつてゐると見えて、今度はそれが口をきゝました。

「この子は貨物にしてこゝから送返したがいゝ！」甲蟲の向ふには何があるのだからあやちゃんには分りませんでした。妙な黄いろい聲で、

「その子につけてやる札には、この小娘、取扱に注意すべし、と書くんだよ。わかつたかい。」と云ひま

した。するとそのあ
とから順々に續い
て——（なんてまあ
たくさんな客がのつ
てゐるのだらう、と
あやちやんは思ひま
した。）いろいろな聲が
聞えました。

「この子は郵便で送る方がよからう、——首がついてゐるから——」この子は電報でことづけてやるにかざる「この子には自分で汽車をひかせたがいゝだらう。」

けれども淺草紙の洋服を着た紳士は、あやちやんの方へ身をこめて、小さな聲でかう云ひました。「あいつらの云ふことは氣にしないがいゝ。だが汽車が止まるたびに、一枚づつ往復切符を買ひな。」



「あら、そんなことあたし厭ですわ。」と、あやちやんはすこし癩癩が起つて云ひました。「あたしこんな汽車へ乗るつもりぢやなかつたんですもの。あたしは今しがたたゞ樹の下で女王さんと話してゐたんですもの。そんなこと云ふならあたしをもとの所へ返して頂戴よ。」

すると、この時機關車の方からキヤーツと云ふ叫び聲が聞えました。お客は驚いて總立ちになりました。あやちやんも一しよになつて立ち上りました。馬がこの時窓からヌツと首を突き出しましたが、すぐに引つこめてみんなに云ひました。

「なあにたゞ汽車が小さな川の上を飛びこしたゞけですよ。」

これを聞いてみんなは安心したやうでしたが、あやちやんはのつてゐる汽車が飛び上つたりなんかすると云ふので、すこし氣味がわるくなりました。さ



うして一體どうしてこの汽車から下りたものかと考へてゐるうちに、汽車はいきなり角兵衛獅子のやうに空に向つて逆立ちをはじめました。

「あら〜〜〜。」びつくりしてあやちやんが手ぢかにあつたものに絶りつきますと、汽車も、淺草紙の洋服紳士も、甲蟲も、羊も、馬も、みんなスーッと溶けたやうに無くなつて、いつか自分は妙な二すちにわかれた路のまんなか、一本の立札につかまつてぼんやり立つてゐました。(つゞく)



＊たんぽぽ

若山 牧水

＊
たんぽぽが咲いた
はたけの畔に
たんぽぽが咲いた
お地藏さんの横に
たんぽぽの花は



＊
たんぽぽやたんぽぽ
まつ黄に咲いた
お地藏さんの横に
はたけの畔に
づらりと咲いた
まつ黄な花が



猩々長者

—ありふればなしその一—

沖野岩三郎



昔、熊野の海濱に、夫れは正直なお爺さんがありました。もう年が六十歳ですから、重い荷物を擔ぐ力がないので、毎日お酢の入った三升樽を二つ擔いで、村中を、

「お酢は如何でございますか。上等のお酢は如何でございますか」と言つて、お酢を賣りあるいてゐました。

所が或日、いつものやうに、海に沿うた並木松の街道をテク〜と歩いてゐますと、

「おい、爺さん、夫れはお酒ですか。」と言ひ乍ら、路傍の蘆の繁みから、ぬツと顔を突出した者がありました。

「いゝえ、これはお酢です。」と云つて、ひよいと其の顔を見ますと、まア何といふ恐ろしいお化けでせ

から致儀がない。」

「嘘を仰しやい！」

「何？ 私は産れて、坊さんの頭と嘘とは言うた事がない。」

「だツて、赤鬼なんて、そんなものがあるものですか。」

「何だツて、いよ〜無いと云ふのか、それなら今見せてやるから。」

「さア見せて下さい、拜見ませう。」

「若し赤鬼が居たならどうする？」

「居たなら、爺さん、私は馬鹿です。御免下さいナ。」と云つて謝ります。

「よろしい、其のかはり、若し居なかつたなら、私が（婆アさん、私は馬鹿です。御免下さいナ。）ツて謝る！」

「えエ、そんなら約束ませう、さ、指切り鎌切り

う。茶色の髪が鬚々と生え延びて、おかつばさんのやうになつてゐます。顔は紅を塗つたやうに眞紅です。眼は純栗のやうにまん圓くて、ギョロ〜と光つてゐます。

爺さん、驚いたの驚かないのツて、「さやア！」と叫んで、三升樽を其處へ投げ出して置いて、どん〜と村の方へ駆けてゐますと、向ふから婆アさんがやつて來ました。

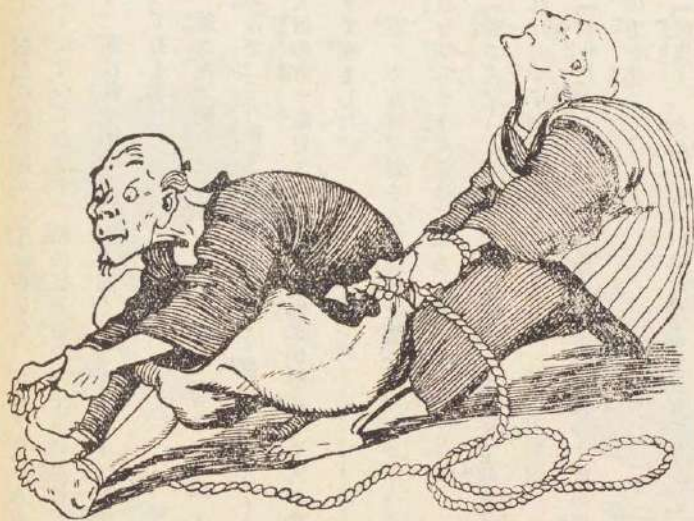
婆アさんは、爺さんが顔色を變へて、ハア〜と息を切らせ乍ら走つて來るのを見て、

「爺さん〜、どうしたのです？ 犬にでも吠えられたのですか。」と訊きますと、

「お化だ、お化だ、赤い赤鬼だ！」と言つて蘆の原の方を指さしました。

「赤鬼？ そんなものが出てたまるもんですか。」

「いゝや、たまツても、たまらないでも、出たんだ



蛇の釜何處ちやを致しませう。」

爺さんと婆アさんとは、「指切り鎌切り蛇の釜何處ちや。」を致しまして松の木の前へ行つて見ますと、爺さんの言つた通り、赤鬼が居て頻りに酢樽を嗅いでゐました。

「居るだらう、さ、私が勝つた、謝りなさい！」と爺さんが餘り大きな聲で言つたもんだから、お化は其聲を聞きつけて、

「爺さん、此のお酢は返してあげます、其の代り、どうぞお酒を下さいますせんか。」と云ひました。

賢い婆アさんは、爺さんに囁きました。

「爺さん、あれは狸々ですよ、お酒の好きな狸々ですよ。」

「成程あれが狸々か、私は権現様のお能の舞で見た事がある。」

「さうですよ、其の狸々ですよ、これからお酒を買

つて来て飲ませてやりませうか。」

「ねエ、お酒を飲ませてやらう、可哀さうに、狸々は貧乏で、お酒を買ふ事が出来ないらしい。」

そこで爺さんと婆アさんとは村へ走つて行つてお酒の五升樽を一つ買つて来て、其の栓を抜いてお化の狸々にやりました。

すると狸々は大喜びで、見る／＼其の五升樽を空にして了ひました。

「爺さん、婆アさん、有難うございます。お蔭で初めてお酒といふものを飲みました。お禮に一つ踊つて見せます。」

と云つて狸々は樽を肩げて面白く踊りました。爺さんも婆アさんも、餘り其の踊りが面白いので、「も一つ踊つて下さい、も一つ踊つて下さい。」と云つて頻りに手を叩きました。

手を拍くし狸々は益々面白く踊りました。けれども二時間三時間も踊つたので、とう／＼狸々は踊り疲れて、ぐつたりと砂の上に倒れて眠つて了ひました。

爺さんと婆アさんは、此の狸々を生捕りにしようと考えました。夫れで大急ぎで家へ飛んで歸つて、有りつたけの細繩を持つて来て、そうツと狸々の足頭を縛りますと、狸々は驚いて眺ね起きました。そして足頭を縛られてゐる事を知らないで、さつさと海の中へ入つて行きました。

爺さんと婆アさんは繩の端を握つてゐましたが、もう繩がすツかり伸びて了つたので、

「さア、引いた／＼、うんしょ、うんしょ……」と云ひ乍ら、二人は力一杯に繩を引張りました。

すると狸々は引出されまいと思つて、海の底で一生懸命に岩だの石だのに、しが

みつきましたが、爺さん婆アさんの力は、なかく強い、たうとう狸々は岸の方へ引出されさうになりました。

所が丁度いゝ工合に、海の底に大きな珊瑚の林があつたので、狸々は其の珊瑚の枝に、しっかり掴まりました。

「もう大丈夫だ。」と思つて狸々は両手でしっかり珊瑚の枝を握つて居たのですが、爺さん婆アさんが、うんしょ、うんしょ……と力を揃へて引張つたので、其の大きな珊瑚の枝が、根本からぼつかりと折れました。そして狸々は其の枝を握つたまゝ岸まで引上げられたが、其時爺さん婆アさんは、ほつと安心して繩を緩めました。

すると狸々は手に握つて居た大きな珊瑚の枝を濱へ投げ捨て、置いて、又た海の中へ逃げ込みました。

「爺さん〜、これは珊瑚ですよ、大變なものが手に入つたものです。」婆アさんは珊瑚の枝を高く差上げ乍ら言ひました。

「やア大變なものだ。これはどんなに安く買つても百兩の値打はある。」では、爺さん、も一度引張りませう。」

聲を聞きつけて、四十人も駆けつけて来ました。

大勢の若い人達が力を合せて、うんしょ、うんしょ……と引張りますと、今度は大きな〜珊瑚の林が、根こぎ岩から離れたので、狸々と一緒に山のやうな大きな珊瑚が濱へ引上げられました。

村には家が七十八軒ありました。で、七十八軒の人達が皆な其の珊瑚を同じやうに分けましたので俄かに七十八人の大金持が出来たのでした。

けれども不思議な事には、夫れから十年も経たないうちに、其の七十八人の中の七十七人は、皆な貧乏になつて了ひました。夫れは其の人達が、俄かに金持になつたので、町へ行つて毎日々々お酒を飲んで遊んだからでした。けれども爺さんと婆アさんとは、お酒を飲まなかつたので、いつまでも〜お金持でした。村の人達は爺さんを「狸々長者」と申しました。(なほり)



「よし、も一度引張つて見よう……」夫れから爺さん婆アさんは、汗みどろになつて、うんしょ〜と引張りましたが、今度はなかく出て来ないのです。

「しっかりしろ！ 婆アさん……」と嗚り乍ら、爺さんは繩を手頸に捲きつけて引張りましたが、なかく〜狸々は出て来ないのです。そこで爺

さんは一生懸命に、
「助けて呉れ……」と叫びました。

畑に働いてゐた百姓達や、山で木を切つてゐた樵夫達が其の

支那イソップ物語
や丸

楠山正雄

金持と息子



金持の家が垣根が、あらしてめちやう／＼にこはれてしまひました。それを見たお金の息子が、

とうさん、早く垣根を直さないと、どろぼうがはいりますよ。」といひました。

するとまたお隣の家のおぢいさんがやつて来て、この垣根を見て、やはり同じことをいひました。

お金持は兩方ともふん／＼といつて聞きながら、すぐに直させようともしませんでした

が、その晩、なるほどどろぼうが入つて、たくさんのお

金や品物をとつて行きました。

その時お金持は、家の息子は、物事に

よく氣のつく利口な子だと思ひました。

そしてお隣のおぢいさんは、あんなこ

とないつて、あれがどろぼうを働いた

のではないかと疑ひました。

虎の皮を着た羊



一匹の羊が草をさがして歩いてゐる中、虎の皮を見つけた。これはいゝものが手に入つたと思ひながら、羊は虎の皮をかぶつて、とくいな顔をして歩きました。

他の動物たちはそれをほんたうの虎だと思つて、あわてて逃げて行くので、羊はい

いよもしろがつて、すつかり虎になつた氣で、大またにそく歩きまはつてあ

ましたが、やはりおいしさうな草の青々と茂つたところへ来ると、つい忘れて夢中

で草をたべますし、小犬や狼

に出會ふと、虎の皮をかぶつたことは忘れて、ぶろ／＼ふるへてゐました。

うはべばかり張さうで、氣の弱い人間のことを、虎の皮を着た羊のやう

だといふのです。



奇術師

宮島 資夫



三六

昔、支那のある町に、お祭りがありました。それはその町では、一年中で一番大切なお祭りだったのですから、その賑やかな事は、口や言葉では言はれないほどでした。町の中には色々な商人が、赤や青や色々な旗をたて、店を飾り、そして笛や太鼓の面白い調べの音も方々から起つて来てゐました。

その町には方々の村から来た人達も一杯に集つてゐましたし、お役所の二階には、赤い着物を着た偉い人達が、居列んで、そのお祭りを祝つてゐるので

何か云ひました。陳の取にはそれが憐れを云つたのだか判らなかつたのですが、その邊に立つてゐた見物の人達は、その男の姿を見ると、「いいい」と云つて騒ぎ出しました。お役所の二階に並んでゐた赤い着物を着た人達も、何か話し合つて笑つてゐるやうでしたが、その中に一人、これは青い着物を着た小役人のやうな人が立つて来て、その男に、
「何か一つ面白い事をして見ろ。」と大きな聲で云ひつけました。

「面白い事と云つて、どんな事を致しませうか。」とその男は恐る／＼聞きました。

「どんな事と云つて、お前には何が出来るのだ。」と役人が聞きますと、

「はい、私は、やれと仰有れば、どんな事でも致します。」と、その男は平氣な顔で答へました。小役人はそれを聞くと、赤い着物を着た人の前に行つて、何

した。

陳と云ふ子供も、その日友達に連れられて遠くの村からそのお祭りを見に来たのですが、人波に揉まれてゐる中に、その立派なお役所の前に出て来ました。陳はまだ小さいのですから、そのお役所が何のお役所だか、赤い着物を着てゐる人達がどんなに偉い人だか判らないで、がや／＼とした人達の中に、たゞぼんやりと立つてゐるばかりだったのです。

するとその時、一人の男が、髪の毛の垂れた子供を連れて、そのお役所の前まで来て、お辭儀をしてか相談して居りましたが、しばらくしてからやつて来て、

「それでは私の見てゐる前で、桃を持つて来い。」と云ひつけました。するとその男は、

「畏りました。」と云つて、擔いでかた箱箆のやうな物を下して、その上に着物を脱いでから、さてまた恨めしさうに子供に向つて、

「どうもお上の人と云ふものは判らない者だ。かうしてまだ川の氷も解けない中に、どうして桃を取る事が出来るだらう。」と云つて取つて来なければ、どんなお叱りを受けるか判らないし。」と云ふのでした。

するとその子は、

「だつてお父さんが畏りましたと云つたもの、仕方がないぢやないか。」と云ひました。その男は、しばらく悲しさうに考へて居りましたが、

「どうもいくら考へて見ても、かう云ふ風に雪の積

三七

つてゐる人間の世界では、どこを探したつて桃なんかありはしない。たゞ天の上の西王母（女の仙人）の庭に行くと、一年中落ちないでゐるのがある。だからどうしても、天まで登らなければ駄目だらう。」と云ひますので、子供は、

「だつて、天に登るつたつて、梯子もなしで登れはしない。」と云ひますと、

「なに、夫れには夫れの術がある。」と云つて箱の中から、長い／＼繩を出しました。さうしてその端を執つて空に向つて投げました。すると不思議にも、天の方で誰か／＼その繩の端を引つ張つてゐるやうに、する／＼、する／＼と真直に空に向つて伸びて行くのです。さうしてやがてその端は、冬空の雲の中に隠れて見えなくなつて、手の中にある繩も盡きました。その時男は子供に向つて、

「私は何しろかうして年を取つて疲れてゐるし、と廻りながら、蜘蛛が糸を傳ふやうに、登つて行きました。さうしてその姿は、やがて雲の中に入つてしまつて見る事が出来なくなりました。見物の人達は聲を立てる事も出来ないで、何うなるかと云ふ風に、たゞ空を仰いでゐるばかりでした。さつきから見物してゐた少年の陳もどうなることかとおど／＼しながら、それでもそこを立ち去る事が出来ないで、ちつと眺めてゐました。

しばらくの時間が経ちました。すると突然お盆のやうに大きな桃が雲の中からばつたりと落ちて來たのです。男は喜んで、

「あゝ、甘く行つた。」と云ひながら、それを赤い着物を着たお役所の人達の前に捧げたのです。お役人達も驚いて、

體も重くから登つて行く事が出来ないから、お前の繩を傳つて往つて來ておくれ。」と繩の端を子供に授けて、

「さあ登つて行け。」と云ひました。すると子供は、むづかしい顔をして、

「お父さん夫れはひどい。こんな細い繩で、どうしてあんな高い天まで登れるものか、もし途中で繩が切れたら、身體も何も、粉々になつてしまふ。」と云ふのでした。すると男は怒つて、

「今更らそんな事を云つても、私が取つて來ますと口をすべらしたものを仕方があるか。決して心配しないで行つて來なさい。若しお前がうまく桃を取つて來さへすれば、御褒美には澤山のお金が貰へて、私達は樂に暮す事が出来るのだ、さあ行きなさい。」と云ふので、子供も仕方なしに、繩の端につかまつて登り初めました。子供の身體はぐる／＼ぐる／＼

その大きな桃をしげ／＼と眺めてゐる中に、こんどは今まで垂れてゐた繩が地の上に落ちて來ました。男はそれを見ると俄かに驚いて、

「あゝ、これはきつと天上で見つかつて、誰れかに繩を切られたのだ。子供はもう歸つて來る事が出来なくなつた。」と云つて、おろ／＼と、そのあたりを廻



るばかりでした。

すると又ばかりと落ちて来たものがありました。男がそれを拾ひ上げて見ると、子供の首なのです。男は首を抱へて、おい／＼と泣きながら、

「これは天上で、桃の番をしてゐる人に見つかつたに違ひない。私の大切な子も、とう／＼死んでしまつた。」と云つてまた泣くのです。

その次には片足が、次には手が、胴體がと云ふ風に、子供の身體はばら／＼になつて、落ちて来るのでした。男は悲しみに堪へないやうに、一々それを拾ひ上げて、箱の中に藏つてしまひました。さうして役人の居並んだ方に向つて、

「私はこの子一人が頼りだつたのです。之れを連れて、かうして國中を歩き廻つてゐたのですが、今仰せに従つて天にやりましたばかりで、こんな事になつたのです。之れから、この死骸を背負つて行

「之れ傷々 傷々 澤山御衛美を願ひたお禮を申上げなければいけないぢやないか。」と云ひますと、髪の毛の蓬々とした子供の頭で、箱の蓋を押し開けて現はれて来た者があります。そして夫れをよく見ると、さつき身體の切れ／＼となつた子供だつたのです。

子供はお役所の階段の上を見て笑ひながら「有難うございます。」

と、御禮を云ひました。そして二人は又箱を背負つて何處ともなく立ち去つてしまひました。見物の人達はたゞ呆氣に取られて黙つてゐるばかりでした。

少年の陳もその不思議な術に驚いて、歸つて來てからお父さんにその事を話しました。するとお父さんは、

「それはきつと、白蓮教と云つて、不思議な術を行

くより外に仕方がなくなりました。」

と云ひながら、お役所の階段に登つて又云ひますのには、

「私はその桃の爲めにとう／＼此の子を殺しました。之れから行つて御葬式もし／＼やらなければなりません。さうしてせめてお墓でも建て、可哀想な子供の魂を慰めてやりたいと思ひます。何卒この哀れな父を憐れんでやつて下さい。」と、また泣きながら云ふのでした。

そこに並んでゐた人達は皆な駭いて、その男を憐れみました。さうして皆んなして、各出しあつた澤山のお金をその男に與へました。すると男は、

「有難うございます。」と、お禮を云つて、そのお金を腰の周りに結びつけてしまひました。

さてそれから、箱のそばに立ち寄つて、

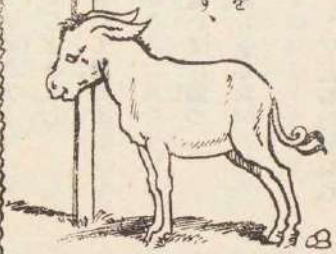


つて人の心を迷はして行く人のする事だ。」と仰しやつたのでした。

その後白蓮教は、支那で色々悪い事をしたものから、とう／＼亡ぼされて、跡を絶つてしまつたと言ふことです。(んはり)

懸賞金二萬圓

この驢馬に乗つて、おちずに町を
一まはりした人に一萬圓上げます、
そのかはりおちたら罰金五圓



6

驢馬「これはたまらぬ、おしりをや
かれたり、首をしめられたり

おつとあ
ぶない

とう／＼しかたなしに歩
き出したが、しやくにさ
はつてゐるので、仇討に
平さんひどい目にあひ

て



1 町の平
うつくの平
さんおれが
一と一
萬圓と
つてや
らうかな



4

これでもかさアはし
れど

ジイー

8

おまけにからだ半分ベンキでべつたり

ベンキアリの用



こんどは木の下をくつたので、
平さん首をひっかけ目をしろく

2

ハイ、おや歩かないとよ
つぞ、けとばすぞ



これでも走らないか
しつぽ引きぬくぞ

5



驢馬「ひどいこ
とをする
奴だ、ふりおと
してや
れ」



驢馬「そんなに首をしめて
はいきがとまるよ」

9

驢馬「やア重たい、大へんな奴がのつたな」

くいつ



鬼鳥の笛 (推慮)

大和左止男

桂吉の家は山の中になりましたから、村へ出るには、森や林を通らなければ行けませんでした。

ある日のこと、お母さんは朝早く村の方へ用たしに出かけて行きましたので、桂吉は獨りで留守番をしていました。三時間、五時間、とたちましたが、お母さんは戻つて来ません。桂吉はさびしくなつて来ました。お日様はだん／＼高く登つて晝頂にな

りましたが、まだお母さんは戻つて来ないのです。

「路に迷つて鬼鳥にでもさらはれたのではないかしら——」と、心配しながら桂吉は森の方へ歩いて行きました。そして、大きな聲で、

「お母さん！お母さん！」と、呼んで見ました。その聲はひつそりとした森の中に響きました。それが消えてしまふと、また元の静かな森になりました。桂吉は耳を澄して立つてゐましたが、淋しくてたまらないので、「お母さんが戻つて来なかつたらどうしよう。」と思つて、泣きさうな顔をしてゐました。

「お母さん！お母さん！」

桂吉はいく度も呼んでみました。けれど、その聲は森の中に響くばかりで何のこたへもありません。しかたがないので桂吉は、家へ戻つて来ましたが、たうとう日が暮れてしまひました。

桂吉は泣き出しさうになつて、燈火もつけずに薄暗い家の中にふるへてをります。その時、表の戸を、

「ドン／＼／＼……」と、たゞくものがありました。

「お母さんが歸つて来た。」さう思つて、桂吉は急に元氣が出て、表の戸をあけました。すると、お母さんはいきなり家の中へ飛びこんで、パツタリ表の戸をしめてしまひました。桂吉はびつくりして、

「お母さん、どうしたの……」といひましたが、何とも言はないのです。お母さんち

欲張り者の大損

昔、神田の籠屋町に築物屋をしてゐる五兵衛といふ男がゐました。なかなか身代がよくつて、大勢の職人を使つてゐました。

ところが、その隣りに質屋で徳力屋の萬右衛門といふ爺さんがゐました。大變な慾張りでしたから、お金があつて、今度倉を建てることになりました。三間四方で三階造りといふ大きな倉です。それを外に空地もあるのに、わざわざ自分の地所を餘計に使つては損だと思つて、五兵衛の地面と地境の處ま



で一ぱいに持つて行つて建てたので、五兵衛はびつくりしてしまひまし

た。もう五兵衛の仕事場へはつととも日が暮らなくなりましてから、警備し出来なくなつてしまひました。

そこで、五兵衛は萬右衛門の處へ行つて「萬右衛門さん、お氣の毒ですがあそこへ倉を建てられては、營業が出来ません。どうぞもう三間だけ退けて建て、下さい。」と、頼みました。しかし、萬右衛門は大變怒つて、

「私の地面へ私の金で倉を建てるのだ。大きなお世話です。お前さんの指圖を受けません。」といひました。五兵衛はがつかりして、その日から營業を休んで、青くなつて考へ込んでゐました。

この事その頃評判の名奉行大岡越前の守が、お聞きになつて、二人をお呼出しになりました。

越前の守は、二人の事情をお聞きになつた後で、萬右衛門に向つて

「これ、萬右衛門、お前は自分ものゝ判らない男だ。澤山空地があるのだから、三間位退けて建て、やつたらいいではないか。」

といはれました。しかし、萬右衛門はどうしても承知しません。

やないのかしら、と思つてよく見ようとしても、暗くてわかりません。桂吉は、おどして暗がり立つてゐますと、やがてお母さんは、だまつて燈火をつけました。桂吉はお母さんの方を見ましたが、思はず顔色を變へて、あわて、傍にあつた箱の中にかくれてしまひました。お母さんだと思つた人は、鬼鳥といふこの邊の山に住んでゐる鬼であつたのです。鬼鳥は恐ろしい顔をしてキョロ／＼あたりを見まはしました。箱の中の桂吉を見つけ出し、さらつて行つてしまひました。

二

暗い／＼森の奥に鬼鳥の棲家がありました。桂吉はそこへつれて行かれて、大きな穴倉の中へ投げこまれましたが、思ひがけなくそこでお母さんにあひました。お母さんも鬼鳥にさらはれて、外の澤山の人たちと一しよに、捕へられてゐたのです。

穴倉へ入れられた人たちは、もはや、逃げ出すことが出来ないのです。たとひ、逃けたところで、すぐとまた、捕へられてしまふのです。それに鬼鳥の住家には、一羽の眞黒な鶏がゐて、一寸でも逃げ出すものとすると、すぐと高い聲で鳴きたてます。それで穴倉の人たちは、どうすることも出来ず、一人一人食べられて行くのを待つてゐるばかりでした。

その翌日のこと、鬼鳥はどこかへ出て行きました。どうかして逃出す工夫はないかと考へてゐた桂吉は、この間に逃げたいものだと思つて、あちら、こちら歩き廻つて居りました。すると、棚の上に鬼鳥が大切にしている不思議な横笛がせてゐるのに

驚つきました。横笛はめづらしいものですから、ためしにとつて吹いて見ました。すると實に不思議です。今まで静であつた部屋の中が急に騒しくなつて、部屋の中にあるものは、机でも箱でも皿でも、みんな踊つてゐるのです。吹くのをやめると踊りは忽ちやんで、元の静けさに返りました。

桂吉は不思議な笛をみつけたので、生返つたやうに喜んで、穴倉の隅に積んであつた俵から麥の粒を出して一ぱい庭の方へまきちらしました。すると、黒い鶏はそれを見つけて、せつせと拾ひはじめましたから、その間に桂吉は、皆を穴倉から出して大急ぎで、裏の



「恐れながら申上げます。私の地面へ私が金を出して倉を建てますに、他人の指圖を受けるわけがありません。五兵衛の方が自分勝手御座います。」といひました。越前の守は賢い方です。萬右衛門といふ男には、道理を聞かせても到底わからなさと悟りましたから「左様か、お前」



にはもう用はない。歸るがよい。」といはれました。萬右衛門は大得意で歸つて行きました。しかし、五兵衛の方は不平で堪りませんから、「御奉行様、萬右衛門のする事に間違ひはございませんか。」といひました。「いや、さうではない。萬右衛門を歸したのは、あゝいふ物からない男

にいくら道理を聞かせても仕方がないからだ。それについて、いゝ智慧をお前に授けてやる。それを實行すればお前の勝ちになるのだ。」かういつて、越前の守が次の様な話をなさいました。これは、つい此の間の話だが、私は元來植木が好きなので、植木を深山庭に植ゑて楽しんでゐたのだ。すると、隣り屋敷の主人といふのが、まことに意地の悪い男で、大變な高い塀を立て、私の庭へ少しも日の當らない様にしてつた。仕方がないから家來をやつて、塀をもう少し低くしてもらひたいと掛合つたのだ。ところが、自分の地面へ自分で勝手に建てる塀であるからお前さんの家の指圖は受けない。と、さういふので、私も止むなく植木屋を呼んで植木をどけさせて、そこへ今度は大きな池を掘つて金魚を飼ふことにした。すると、穴を掘つたものだから隣の塀が倒れかゝつて来たよ。ハハ……、どうだ。五兵衛いゝ智慧だらう。」

五兵衛は大喜びで、越前の守にお禮をいつて歸つて行きました。五兵衛は

大きな木へ登らせてしまひました。皆なが登つてしまつたのを見ましたので、今度は固油を持つて来て鬼鳥が来ても、すべて登れないやうに木の幹の下の方へ一ぱい塗りました。それから桂吉は鬼鳥の食ひ残して置いた人間の骨を袋に一ぱい詰め込んで、腰にぶら下げ、不思議な笛を手に持つて、自分も木へ登り始めました。

やがて桂吉が、太い樹の幹を二三間も上つたと思ふころ、黒い霧は、はじめて気がついて、見ると穴倉の人があるないので、びつくりして大聲で鳴きました。

すると、忽ちすさまじい風と一しよに、鬼鳥が戻つて来ました。鬼鳥は木を登つて行く桂吉の姿を見たので、真赤になつて怒り鋭い爪をむき出して、木に飛びつくが早いか後から追ひかけて上りました。その早いこと、早いこと、見るまに桂吉は追ひつかれさうになり、手早く腰の袋から骨をとり出して下の方へ投げつけました。

鬼鳥は何かおもしろいさうな物が落ちて来たと思つて、急いで木から降りましたが、見ると人の骨だつたので、また火の様に怒つて樹に登りかけました。桂吉は追ひつかれさうになると、また骨を投げつけました。すると、鬼鳥は一寸追ふのをやめて、また下の方を見ましたから、桂吉はその隙にまた骨を投げつけました。鬼鳥は考へこんで下を見てゐます。そこで、こんどは袋ごと投げつけました。鬼鳥はだまされるやうな気がしながらも、下りて行きましたが、やつぱり骨であるのを知つたので、ますます腹を立て、追つて来ました。——たうとう追ひつきさうになつた時、桂吉はやうやくのことで枝のある處まで登ることが出来ましたから、す早く枝に腰をかけて用意の笛



を吹き立てました。鬼鳥は笛の音をきくと、今までの事は忘れてしまつたやうに、する／＼と木から滑り下りて、面白さうに踊り出しました。そこで桂吉が一層はげしく吹きたてますと、鬼鳥はいく／＼はげしく踊り廻りました。

桂吉がいつまでも吹いてゐたので、しまひにたうとう鬼鳥は踊りつかれてぐつたりと倒れてしまひました。もうどうすることも出来ないほど疲れてゐるので、桂吉は笛を吹くのをやめました。

木に登つてゐた人たちも、その時はみんな下りて来て、力を併せてたうとう鬼鳥をとりおさへてしまふ事が出来ました。そこで、皆んなは漸く安心してめい／＼の家へ歸りました。(をばり)

家へ入ると、いきなり大聲で「おい、俺は今日から商賣換へだ。金魚屋になるのだ。何でもい／＼から、これから行って金を十疋と銀を十疋、買つて来い」と、いつ／＼買ひにやりました。五兵衛の家には十三人の若衆が居ましたが、その十三人が總が／＼りて、地蔵の處からドン／＼穴を掘りはじめ



したからさア大變です。忽ち大穴が出来上つたので、三間四方三階造りの萬右衛門の倉の地形は見る間に狂ひが起つて、少しづつ北の方へ傾きかけて来ました。それを見た萬右衛門は魂消て了つて、五兵衛のところへ駈込んで来ました。

をするちやないか。い／＼お前さんの地面だからつて、私の家の土蔵の壁まで狂せるつてあんまりだ。あれ、御覽なさい。あの通り大事な倉が北の方へ倒れかゝつたやありませんか。お願ひだ。どうかそれだけは止して下さい。萬右衛門は泣聲を出して頼みました。しかし、五兵衛の方ではそれ見るといはいばかりに「おい、萬右衛門さん、私の地面へ私の金で勝手に穴を掘るのです。お前さんの指圖を受ける譯はない筈だがね」と、いひました。いはれて萬右衛門は、しほ／＼と置つて行きました。しかし、そのまゝ置いては大變なので、それから毎日かゝつて、大急ぎで倉を地蔵から遠く離して建直しました。それを見た五兵衛は「それ穴を埋る」といつて、大聲して元通りにして了つて、その日からせつせと仕事をはじめました。



こゝへ盛り上げて
して、
『いかに何ほ何でも
此井に、かう山盛
りに盛ったやつを、
重ねて五杯食べられ
る仁があるかい、あ
つたら、田地一反歩

進めるがなア。』
と、おもしろげに言ひ出でました。
樵夫は『徳が食べて見せよう』と、受合つて
先づ三杯食べましたが、それでお腹が一杆は
ちされる程になりました。
『よし、では次の間へ行つて、こつそり、と
ろかし草を食へて来よう。』
と這入つたきり出て来ませんので、人々が心

配して、開けて見ま
したら、着物ばかり
で、樵夫の身体が、
不思議にもどろろ
にとろけてをりまし
たさうです。
(伊豫阿波の話)

諸説童話
傳説童話

藤澤衛彦

とろかし草

突然、後方で、けたましい叫び聲が聞え
ましたので、木の皮に履かけながら、一息か
うとくしてをりました樵夫は眼を凝らしし



た。振返つて見ますと、丁
度、一人の旅人が恐ろしい
大蟒蛇に一番みにされてる
ところでしたので、ぶるぶ
るつとしましたが、狂瀧に
動くと氣のつかれる恐怖が
ありますから、度胸を定め
て、蟒蛇のたち去るのを待
つてをりました。ところが
蟒蛇は其儘たち去る様子も
なく、却つて樵夫のある方
へ、段々によつて来るやうな
ので、樵夫も顧念して、若も自分に向つて来
たら、及ばずながら山太刀を打下してくれよ
うものと思つてをりましたが、どうやら、そ
んな様子もなく、蟒蛇は、樵夫のある樹の下を
通り抜けて、すぐ近くの叢の中に這入り、其
處で、妙な草を頻りにこいては呑み込んで
なりましたが、其うちに、不思議や、人を呑
んで彫れてゐた蟒蛇の腹の瘤が、見てゐる間
に細くなつてしまひましたので、樵夫は眼を

丸くして驚き、
『おや、これは
怪しい、あの草には
物をとろかす不思議
な力が潜んでゐると
見える。』かう思つて
樵夫は、蟒蛇のたち
去つた後で、その奇
妙な草を採つて村へ
歸りました。
村へ歸ると、人々
は『まつめでたい、
大蟒蛇に出逢つて助
かつた者といつた
ら、今までに全くお
前さんばかりだ。』
と集つて、手打の蕎
麥で祝ひをしてくれ
ましたが、その席上
一人の百姓は、敢れ
に、大井に蕎麥を





悪龍の閉口

(つゞき)

馬場 孤蝶

したよ。私はやつとのことで止めた位です。」と、話しました。

龍の母親も大分心配し始めました。月の中へ物を投げ込むといふのですから、これは何うして大變なことです。いや、決して冗談事ではありません。それで、もう棒を投げる話はそれきりにしてしまつて、その明くる日までに、母子で、スタンに弱らすやうな何か他のことを案じ出すより外はありませんでした。

その次ぎの日の夜明になりますと、龍の母親は、

「雁をして居るんだい？ 何ういふ風にして、水を家へ運ばうといふんだい。」と、龍が訊きました。

「何ういふ風も斯ういふ風もあるものかい。なアに、水を運ぶんならア譯があるものかい。俺は一寸と川ごと掘取つて持つて行くよ。」と、云つて、スタンは、悠々と土を掘り続けました。

その言葉を聞くと、龍は全く仰天してしまひました。

その小川は龍の祖父の時代このかた其處にあつて一向他へ動きもしないのに、それに今スタンは川ごと水を龍の家まで持つて行かうと云ふのです。龍に取つては全く思ひ掛けない事なので、甚く驚いてしまつたのです。

「まあ待つて呉れ給へ。それは斯うしよう。水は僕が君の代りに汲むことにするよ。」と、龍は甚く周章て云ひました。

「これへ水を汲んで来てお呉れ」と、いつて、水判の皮袋を十二、龍とスタンに渡しました。夜になるまで、それへ水を汲んでは運び入れろと云ふのでした。

で、スタンは直ぐに龍と一緒に、小川へと行きましたが、瞬一つする間に、龍は十二の皮袋へ一杯水を汲み込んで、家へ運んで行つてから、直きに空になつた袋を持つて、スタンの居る小川の側へと引つ返して来ました。スタンの方は何うだと云ひますと前の日以來の心勞で疲れ切つて居ましたので、空の袋でさへ十二枚持ち上げることは到底できませんでしたから、まして、それへ水が一杯入つて了つた時には何うだらうと思ひますと、唯さう思つただけで、慥然としてしまひました。けれども、スタンは弱つた様子などは少しも見せずに、衣籠から古い小刀を出しまして、小川の側の土を掘り始めました。

「いや、さういふことは何してもできない。」と、云つて、スタンは土を掘る手を少しも休めません。龍は、スタンが實際小川を掘り取つて持つて行つては大變だと思ひましたので、いろ／＼とスタンの機嫌を取つて、川を掘り取つて止めて貰はうとしました。それで到頭、金貨の袋をもう七つスタンにやるといふ約束で、小川はその儘にして置いて、龍がス

タンに代つて水を汲んで運ぶことにするやうに承諾させました。ですから、此れも無論、龍の負けになつた譯です。三日目になりますと、龍の母親は、スタンに森へ行つて木を伐つて来いと云ひ付けました。で、スタンは早速森へ出かけましたが、例の通り龍も一緒に行きました。



並の人間が一、二、三と云ふ位な間に、龍は森の木をどん／＼引き抜いて、それをば綺麗に幾つもの山に積み列べました。それだけの木は、スタンが生か／＼つても伐れるものではありませんでした。龍が木を伐つてしまひますと、スタンは四邊をキヨロキヨロ見廻して居てから、森の中での一番大きい樹を仕事を續けて居ました。一樹を縛り合せて何うしようといふんだい。」と、龍がまた訊きました。

「俺は無益な骨折を一度くなくならなんだ。一本

擇んで、それへかけ登つて、長い葛藤を繩にして、その樹の頂上をその隣の樹の梢へと縛り付け、それから又それをばその次へといふ風にして、その邊の樹を一度り皆頂上を縛り合せてしまひました。「おい、何をして居るんだい？」と、龍が下から訊きました。

「まア、見て居ろよ。」と、スタンは答へて、悠々と

引き上げば、他のが皆な隨いて来るやうにしようといふんだ。と、スタンが云ひました。「でも、何うしてそれを家へ持つて行くことにするんだね？」





五六
「いや、それが君にやア解らないのかい、俺は森ごとすつかり持つて行かうといふんぢやアないか。」と云ひながら、スタンはまた二本ほどの樹を縛り合せました。

龍はいよ／＼驚いて慄へ上がつてしまひまして、斯う叫びました。いや、待つて呉れ給へ。それは、斯うしようぢやアないか。君はもう木を持つて行くには及ばないよ。僕が君の代りに木を運ぶよ。その代り君には金貨の一杯入つた七袋の七倍をあげることにするから。」

「いや、いろ／＼と御親切有難う。宜しい、君の云ふ通り承知した。」

と、スタンが答へましたので、木はすつかり龍が運びました。

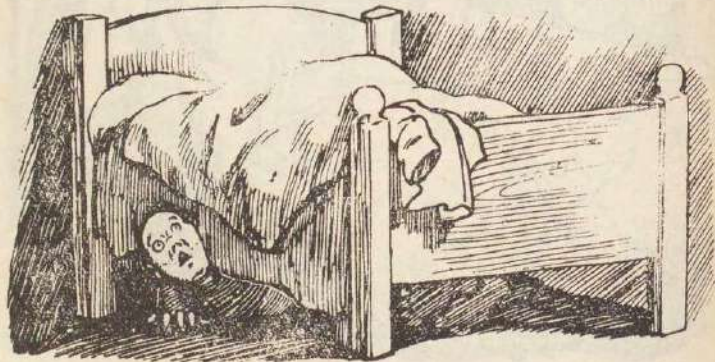
斯ういふ風で、三日目も、龍が負けてしまひました。

せんか。と、龍が云ひました。

けれども、母親の方は、金銭が惜しかつたのです。で、息の考へを喜びませんでした。

「いゝえ、それは私の云ふ通りにおしなさい。今晚彼奴を殺しておしまひ。」と母親は云ひました。

「でも、彼奴は



所で、並の世の中の一年に相当しますといふ三日の勤務がそれでおしまひになつたのですから、スタンはそれでも自分の家へ歸れることになりましたので、スタンの心配は、何うしたらば、龍から貰つた澤山の金貨をば、自分の家まで持ち運ぶことができるだらうかといふ問題のみでありました。

晩になりますと、龍の母子はスタンのことに就て長い間いろ／＼と相談しましたが、天井に穴があつたので、スタンはその相談をばすつかり漏れ聞いてしまひました。

「母親さん、もう何うにもしようがありませんよ。此の儘にして置けば、直に彼奴の爲に、吾々は思ふやうにされるやうになつてしまひますせ。早く約束通り金銭を遣つて、歸らせてしまはうぢやアありませんか。」

怖いです。」と、龍が云ひました。

「何んの怖いことがあるものかね。彼奴が眠ってしまったところを見澄して、彼の棒を持って行つて、頭をがんと一つ喰はせればいゝんだよ。わけなくできることぢやないかね。」と、母親は云ふのでした。

若し、スタンがさういふ相談を漏れ聞かないのでしたら、全くその通りわけなく片付けられてしまふところなのであります。けれども、スタンはその



彼半には龍が自分を驚しに来ることを知りませんでしたので、龍の母子が燈を消して、床に就いたと見るや否や、そつと外へ出て、豚に餌をやる石鉢を持って来て、それに一杯土を詰め、それが何うにか人間の頭らしく見えるやうにし、それを寢臺の上へ置いて、衣服をその上へ被せ、そして、自分はその寢臺の下へ隠れて、わざと大きく空駢をかいて居ました。

間も無く、龍がスタンの部屋へ抜き足差し足でそつと忍び込んで来て、棒でもつて、スタンの頭があるべきであつた場所へと恐しく烈しい一撃を與へました。スタンは抜からずに、寢臺の下で大きい唸り聲を出して、さも棒でうち殺されたやうに見せかけました。龍は占めたと思つたらしく、来た時と同じやうな忍び足で、部屋を出て行つてしまひました。スタンは直ぐ戸を閉めて、石鉢を寢臺から下し、部屋の中に落ち散つて居る土などをすつかり掃除して

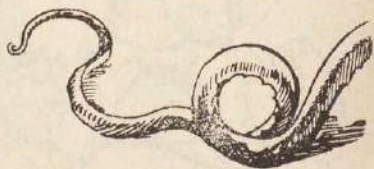
寢床へと入りましたが、それでもその晩は用心して夜ちう一度も眼を閉ぢずに居たのでした。

翌朝になりますと、スタンは平氣な顔で、龍の母子が朝食を食つてる部屋へ出て行きました。「お早う。」と、スタンは勢ひよく云ひました。

「お早う。昨夜は熟くお眠みでしたか？」と、龍が訊きました。

「え、熟く眠みましたよ。でも、何だか蚤こ蝨された夢を見たやうな氣がしますよ。まだ少し其處が痒いやうです。」と、スタンは答へました。

龍の母子は互に顔を見合せました。「何うです。あの通りなんですせ。蚤に蝨されたなんて云つて居ます。私は彼奴の頭を棒が折れる程殿



りつけたんですのにねえ。」と、龍は母親にさしやき
ました。

もう今度は、母親も件と同じやうに怖がりだ
しました。もうスタンのやうな強い男は何うにもし
うがないといふことになりました。其處で、もう母
親は慾も徳も無くなつてしまつて、できるだけ早く
スタンを歸してしまはうといふので、大急ぎで約束
通り、金貨を袋へ詰めて、スタンの前へ列べました。
けれども、スタンの方では、一袋だつて持ち上げる
力は無いのですから、困り切つて、まるで白楊のや
うにぶる／＼慄へて居りました。スタンは唯ちつと
立つて、龍の母子の顔を見て居るのみでした。
「何で、さうして立つて居るんですか？」と、龍が
訊きました。

「いや、今一寸考が變つたんで斯うして立つて居
るんだよ。俺はね、もう一年君のところへ使つて貰
つた一年の中に龍のやうに弱くなつてしまやアがつ
た」などと云ふだらうからね。」と、スタンは云ひ
ました。恐怖の叫び聲が龍の母子の口から同時に
出ました。母子は、スタンが歸つて行つて呉れるとさ
へいふのなら、金貨の七袋の七倍どころか、その又
七倍でも喜んで出すと云つたのです。

「では仕方がないから、斯うしよう。君等は何うも
俺が此處に居るのを厭がつて居るらしいね。さう分
つて見ると、俺の方も厭がらせをする氣は少しもな
いんだ。では、直ぐ歸つて行くことゝしよう。だが、
それは、君が此の袋を皆な持つて俺の家まで送つて
来て呉れるといふんでなけりやア、駄目な話なんだ
せ。俺は此れんばかしのものを自分で提げて行つた
んぢやア、世間の思はくも辱しいんだからね。」と、
スタンは、到頭云ひました。

斯ういふ言葉がスタ
ンの口から出るか出な
いうちに、龍は金貨の
袋を取り上げて、皆な
自分の脊部へ載せてし
まひました。其處で、
スタンは龍と一緒に自
分の家をさして出かけ
ました。

スタンの家までの路
は實際はさう遠くはな
かつたのですが、スタ
ンに取つては、それ
も遠過ぎたのでした。
けれども、やがて、小
兒達の聲が聞える所ま



で歸つて來ました。スタンは其處でビタリと立ち止まつてしまひました。スタンは、自分の住んで居る場所をば龍に知られ度くなかつたのです。それは、龍がスタンに騙されたことに気が付いて、金貨を取り返して來ないものでも無いと思つたからでした。何とか云つて、此處で此怪物を歸してしまふ方はないものだらうか？ 不意に旨い考がスタンの頭へ浮んで來ました。スタンは直ぐ龍を振向きました。「何うも困つた事があるんだ。俺は小兒が百人あるんだがね、それが皆な氣が荒いんでね、君に怪我でもさしはしないかと、先刻から俺はそれが心配になつて居るんだがね。だが、まア安心したまへ。俺ができるだけ君を保護してあげるから。」と、スタンは、さも心配らしい顔付で云ひました。

六二
てしまつて、金貨の袋を取り落して、又それを拾ひ上げました。けれども、恰度その時、父親が家を出て行つてからといふもの、今まで何も食ふ物無しで居ましたところの百人の小兒等は、父親と龍の姿を見ましたので、一散に父親の傍をさして駆け集つて來ました。小兒等は手ん手に、右手にはナイフを持ち、左手にはフォークを持つて、それを振り廻しながら、「龍の肉をくはしてください。私たちは龍の肉を食うんだ。」と、叫びながら、やつて來るのでした。さういふ凄惨な光景を見ますといふと、龍はもう小兒等が傍へ來るまで待つては居ませんでした。龍は其處へ金貨の袋を皆な投げ落して、命から／＼逃げ出してしまひました。龍は全く慄へ上つて逃げたのでした。よく／＼懲りたものと見えまして、それからといふものは、又と再び、此の世の中へは影さえ見せぬやうになりました。(をほり)



白狐の怨

霜田史光

一
昔ある大きなお城の裏山に白狐が住んで居りました。その狐には一匹の子があらまして親の狐は大層それを可愛がつてゐました。それで、子狐に何か上味しい物を食べさせたいばかりに、親の白狐は夜になるとお城の中へ忍んで行きました。そして、賄所へ行つては魚だの、油揚げだの、天麩羅だの、其外種々なお料理を盗んで來ては子狐に與へました。或日子狐は親狐に向つて云ひました。

「お母さん、己は鯛が食べたくなつたよ。」

「何？鯛か、よし／＼、ぢア今夜行つて盗んで來てやらう。」

と云つて、その夜もお城の中へ忍び込んで、縁の下からそつとをどり込み賄所へ這入つて見ましたけれども、鯛は見つかりません。何んでも毎朝殿様が鯛を召上るといふことだから何處かあるに相違ないと、一生懸命あらちちらと探して歩きました。すると一段高い所に棚がありまして、其處に小さな幕が垂れてゐるやうです。はて、あそこが臭いぞと思つてひよいと前足を舉げて飛びついて見ますと、篋に、中にあるのは殿

様のお勝らしいもので大層立派でした。そして唐模様のお皿の上には生々とした大きな鯛があるではありませんか、狐はバたと思つて口に銜へるとその拍子にお勝ががら〜がらと落ちました。失敗つたと思ふと、

「何んだ、何んだ。」と云ひながら人が起きて来る様子ですぐすくしてると捕まつて了ひますから、狐は急いで縁の下をく〜り抜けて逃げ出しました。穴へ歸つてくると子狐が待つてゐました。

「おッ母さん、鯛を盗つて来たかえ。」

「今夜は駄目だった、明日の晩は吃度盗つて来てやるから我慢しておるで。」といつて子狐を慰めました。

その翌晩にはうまく〜と盗つて来て子狐を喜ばせましたさうしてそれからは毎晩々々殿様の鯛を盗みに出かけますと、賄所の係の侍が驚きました。始めの内は鼠が引いて行くのだと思つてゐましたら、どうもさうらしくはないので、これはあの白狐の奴の仕業に相違ないと、一つ生捕つてくれようと二人の侍が相談しまして、縁の下のく〜りさうな所へ罠をかけて置きました。するとその晩も

たう、軍右衛門は劍術の名人で皆の侍に敵へてゐました。

軍右衛門は白狐の話を知くと、それでは俺が一つ退治してやらうといひました。そして或夜殿様の寢所の近くに隠れてゐました。真夜中頃になりますと、ガリ〜ガリ〜ガリ〜と、雨戸を引ッ掻く音がします。いよく来たなと思つてゐますと、その内にだん〜物音が激しくなつて、二三度ガタ〜と雨戸が揺れたと思ふと、急に戸が軋つて三寸ばかりの隙間が出来ました。すると其處から白い煙のやうなものがス〜ツと這入つて来ます。軍右衛門は此處だと思つて、その煙に向つてヤツと斬りつけました。「キヤツ〜」といふ聲がしたと思ふと、廊下には血に染つた白狐が斃れてゐました。

「軍右衛門只今白狐を退治した。」と軍右衛門が大聲でいひますと、澤山の侍がどや〜どやつて来りました。

その晩、子狐は山の穴の中で寒さに顫へながら、親狐の歸つてくるのを今か今かと待つてをりました。けれども、いつも歸つて来る時分になつても親狐は歸つて来ません。「おッ母さんは殺されて了つたんだらうか。」

白狐は賄所へ忍んで行かうとして、縁の下をく〜らうとすると、ふと鼻の先へ何か網のやうなものが當りました。「は〜ア、侍め、罠をかけやアがつたな。」と其處は古狐のことですからよく知つてゐまして、その晩は這入らずに歸つて来て了ひました。その翌晩も、またその翌晩も這入ることが出来ません。狐は大層口惜しがりました。

「よし、それなら外にうんと悪戯をしてやる。」と獨言をいひました。それからはお池の金魚を取つたり、大切な植木を折つたり、燈籠をひつくり返したり、時々は殿様の寢所に忍び入つて殿様を惱ませたりしました。

すると殿様はたいそうお怒りになつて、「誰ぞ白狐を退治するものはないか。」と家來の者に向つていひました。家來の侍は、我こそあの白狐を打ち果して殿様のお譽めにあつたらうと、皆が白狐に向ひましたけれど、白狐は變化自在で中々打ち果すことが出来ないばかりか、或者は顔を引掻かれたり或者は足を齧られたりしました。

二 そのお城に於て軍右衛門と云ふたいへん偉い侍がをりました



さう思ふと急に悲しくなつてシク〜泣き出しました。

すると、夜明近くになつて、青い火の玉がス〜ツと空中を飛んで来て、穴の中へ入りま

した。子狐はおやと思つて顔をあけるとたんに、

「今歸つて来たよ。」といふいつもに變らぬ親狐の聲がしました。しかし、子狐は穴の中を見渡しました。けれども影も形も見えません。するとまた、

「おれはな、軍右衛門といふ侍に殺されたよ。」

といふ哀れつほい親狐の聲がしました。

「おッ母さんは殺されたの！そして今何處にゐるの！」と子狐は涙ながらにたづねました。

「何處にツて此處にゐるぢアないか、併し、もう體は無くなつて、魂ばかりになつちやつたんだから、お前には見えまいね。」

「うん、ぢア、さつき青い火の玉が穴の中へ入つて来たつけ、あれはおッ母さんかえ？」

「あゝさうだよ。」

「おッ母さん、軍右衛門の奴、おれ、敵討つてやらア。」と子狐はさも口惜しさうに云ひました。

「およしよ、軍右衛門は怖いよ、そんなことをしようものならお前も殺されて了ふよ、併し、己も口惜しいから、軍

りてした。白狐の斬られたのを見ようと人が黒山のやうに集まつて來ます。その人達は口々に、

「軍右衛門さんは偉い、一刀で斬り捨てた。」

と皆軍右衛門の働きをほめました。殊に殿様は大層お喜びになつて、軍右衛門に澤山の御褒美を下さいました。

軍右衛門は家へ歸つて來て、多くの門人や、悴の軍次を呼びよせて昨夜のことを委しく話しました。門人達はみな先生の軍右衛門をほめて、悪狐の殺されたのはいゝ氣味だといひました。ところが軍次一人は、

「可哀さうなことをしました、狐は殺されてさぞ無念だつたでせう。」といひました。すると父の軍右衛門は問答めて

「何？可哀さうだと、無念だつたらうと、お前は妙なことをいふではないか、殿様始め人々を惱ませてゐる悪狐を退治したのぢや、こんな目出度いことはないではないか。」

さういはれて軍次は黙つてしまひましたが、まだ何か物をいひたいやうな素振でした。

軍次は中々利口で學問もあるし、劍術も父の軍右衛門から教はつて、今では中々の達人になつてゐました。そして



六六

右衛門の悴の軍次にとつついてやるよ、そして悴の手で軍右衛門を殺さしてやるよ。」といひました。そして、青い火の玉はまたスーッと穴から出て行きました。子狐は急に獨りになつたと思ふと悲しくなつて、シクシク泣き出ししました。

三

その翌日になると、お城の中は昨夜の白狐の話で持ち切

りも正しく親孝行もいたしました。所がどうてせう、父の軍右衛門が狐を殺してからといふものは、だんく性質が變つて來ました。學問や劍術をおろそかにして、遊んで歩いてばかりゐりました。父や母が心配して小言をいふと、大層ふくれ面をして

「私のことは私に委して置いて下さい。」と言ひました。父も心配はしましたが、その内に目が覺めるだらうと思つてそのまゝにして置きました。けれども何日までたつても軍次の悪い心は直りません。遊びに行つて何處かへ宿つてゐて幾晩も家へ歸らないこともありました。

或朝父の軍右衛門は悴の軍次を呼びつけて

「これ、軍次、今日までは貴様もその内に目が覺めるだらうと思つて待つてゐるが、近頃の様子では實にあきれ果てた奴だ。わが家は殿様の御指兩番といふ重い役だ、その重い役の後とりといふべき貴様は何んだ、毎日のらくら遊び暮してゐるなんて、不届な奴だ、貴様のやうな奴はあつて却つて家名の汚れになる。今、この父が手打にいたすから覺悟をしろ。しかし、もし貴様がすつかり改心して元通り

學問や劍術を一生懸命にやるのなら
今度だけは助けてやる、どうだ。」

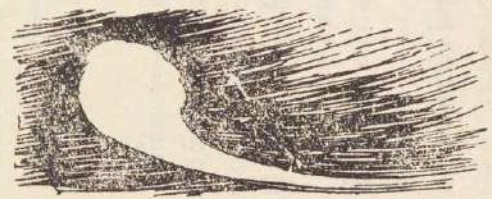
と恐ろしい權幕で云ひまして刀の
柄に手をかけて今にも斬りつけさう
な様子でした。すると軍次は、ぶる
ぶると身軀ひして

「お父さん、私が悪うございまし
た。どうぞ許して下さい。もうすつ
かり改心いたしました。」といつてさ
めざめと泣きました。

「よし、改心したとあれば助けてや
る。その代り當分の間一歩も家から
出てはならんぞ。」

「はい」といつたが、軍次は何處か不平さうな處がありま
した。

軍次は二三日の間は一牛懸命にやつて見ましたけれども
一度意解癖がついてしまひましたので、どうも苦しくて仕
方がありません。そして遊びにゆきたくてならないのです



が、父の眼が恐いので行くことが出来ません。

或夜のこと、軍次は翌朝父の食べるものの中へ、そつと
毒を入れて置きました。父の軍右衛門は何も知りませんか
ら、翌朝そのお料理を食べました。すると間もなくたいへ
んお腹が痛くなつて、ちぎりに死んでしまひました。さア、
門人衆やら、城中の多くの侍やらが大膽ぎをいたしました
が、どうも急病で亡くなつたのだといふことより外に、何
の證據もありませんでした。軍次は腹の中ではこれからど
んなことでも自由に出来ると思つて喜びながら、表面では
大層悲しがつて無理に涙をこぼしたりしました。

四

子狐は親狐が殺されてからは、一人で食物を見付けに出
かけなければなりません。始めの内は大層骨が折れました
が、だんぐと野鼠を捕へたり、赤蛙や、おけらや、時々
は小川へ行つて鯉魚などを捕ることを覚えしました。晝間の
うちはなかく外へは出ずに穴の中に縮くまつてゐますが
夜になるとそろ／＼出掛けます。

或夜のこと、宵のうちに山中をあつちこつちと歩いて
青い火はさう云つたかと思ふと忽ちスツツと外に出て行
きました。

子狐は何處へ行くのかと思つて外に出て眺めてゐます
と、お城の方に眞直に矢のやうに飛んで行きました。

軍次は父の軍右衛門を殺してうま／＼と御指南番の後目
をとりました。

併し、悪い心になつた軍次は録すつば劍術も教へずに毎
日のやうにのら／＼と遊んでゐました。そんな風ですから、
お城の中の侍達は非常に軍次を憎んで、早く廢めさせら
れて了へばいゝと口々にいつてゐました。

或夜軍次は眞夜中になつて眼がさめました。

見ると神棚のお燈明が風もないのにゆら／＼と揺れてゐ
ます。軍次はそれを見ているうちに體全體が水でもけから
れたやうにぞつと寒氣がいたしました。そして今迄自分の
したことが大變悪いことだと氣がついて後悔の涙をボタボ
タと落しました。

併し、朝になると軍次は一寸も後悔をいたしません。昨
夜のこととはけろりと忘れたやうにしてゐました。それで、

見ましたが、何んにも怖れませんので、夜中寝がっかりし
て歸つて來ました。穴の中へ這入ると、その時、幽な青い
火の玉がスツツと穴の中へ飛んで入つて來ました。子狐は
何日ぞやのことを記憶えてゐますから、これは親狐の魂
が來たのだなと、すぐにさう思ひました。

「おッ母さんかえ？」と子狐は聞いて見ました。

「あゝ、さうだよ。」と、その魂は答へて、

「お前、喜んでおくれ、やうやく己の望みは叶つたよ、軍
次の奴にとつついて、とう／＼軍右衛門の筋を殺さしやつ
たよ、うれしい／＼。」

といつて青い火の玉は狭い穴の中をぐる／＼廻りました
すると子狐も手足を動かして、

「うれしい／＼。」と云つて跳ね廻りました。

「だがな、己はお前のことが心配でならないので、早く來
て見たかつたのだけれども、何しろ一寸でも軍次の體から
離れて、若し軍次に改心でもされようものなら、折角の計
畫が水の泡だからな、だが、これからは毎晩夜半頃軍次の
よく寢静まつた時を見て、飛んで來るよ。」

また夜が来て、一寝入すると真夜中頃きまつて、何處からか寒い風が吹いて来て眼が覺めます。見ると昨夜のやうに御燈明がゆらくと揺れてゐるのです。そして軍次は頭を



かき攪りたい程の後悔の心にせめられて苦しむのです。さうしてこのやうなことが、それから毎晩續きました。

軍次はずん／＼と顔色が悪くなつて來ました。皆のものが心配して或日行者に伺つて貰ひました。するとその行者はかういふことを云ひました。

「人間の心の中には善い心と悪い心とがある。善い心は生れ落ちると一緒に神様から下されたものだが、悪い心は途中から出来るのだ、それで善い心の方が多い人は善人で、悪い心の方が多い人は悪人となる。お前さんがそんなに體が病氣でもないのに弱つてしまふのは、心の中で善い心と悪い心とが今大戦ひをやつてゐるからだ。早くお前さんは悪い心を退治して了はなければいけない。」といひました。軍次は心に思ひ當ることばかりでした。

併し、軍次は考へました。夜だけ後悔して晝間後悔しないのは變だ。これは何か悪いものでも自分についてゐるのではないかと思つたのです。それでまた暫らくしてから行者に伺ひました。行者は一心に神様を祈つて後に「それはお前さんには狐の怨がとつついてゐるのだ。毎晩

寝か苦しむといふのは、正しい神様が心の中で働いてゐるのだから、その時は「生懸命お祈りをして御覽なさい。」といひました。軍次は何のことやらよく判りませんでしたけれども、その晩は眼が覺めたらすぐ「生懸命で神様にお祈りをいたしました。すると明方近くなつて青い火の玉がスーツと飛んで來て自分の胸に突き當つたのを幽かに見ました」「は、ア、これだな。」と思ひました。

その翌晩、軍次は刀を抜いて待つてゐました。「生懸命お祈りをしてゐると、例によつて御燈明がゆらくと揺れて、軍次の心は後悔の涙で一ぱいです。

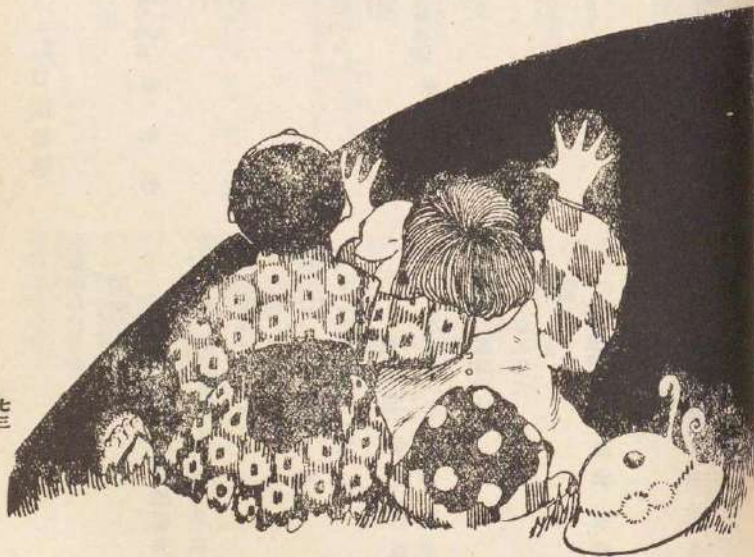
「神様、私が悪かつたのです、悪かつたのです、許して下さい、許して下さい。」と口にいひながら、軍次は「生懸命お祈りをしてゐました。すると夜明近くなつて、幽かな、青い火の玉がスーツと飛んで來ました。

「それ。」と思つて軍次は、今まさに胸に突き當らうとしてゐる青い火の玉をねらつてズブリと刀を突き差しました。「ウーン。」と云ふ叫聲に家の人々は驚いてかけつけて見ますと軍次は自分の胸を刀で貫いて倒れてゐました。をばり



雁が
紐になつて
帯になつて
雁が
歸る

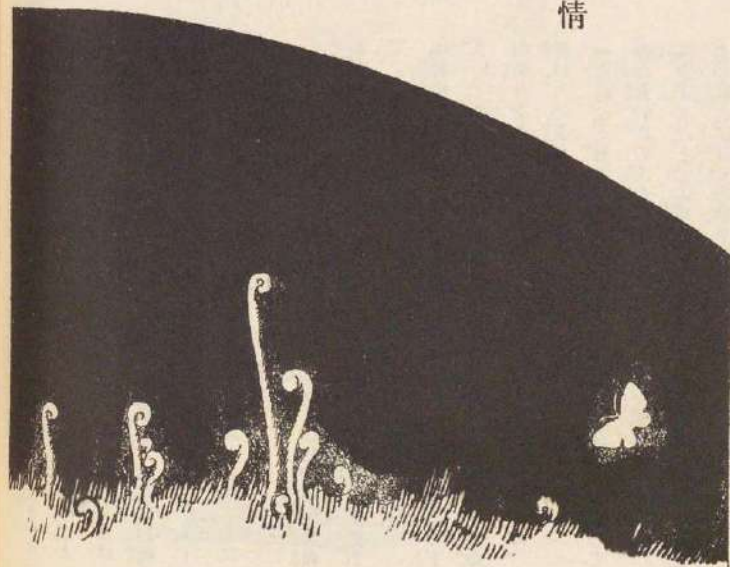
山が
海が
風で
暴れた
山が
海が
暴れた
暴れた
歸る

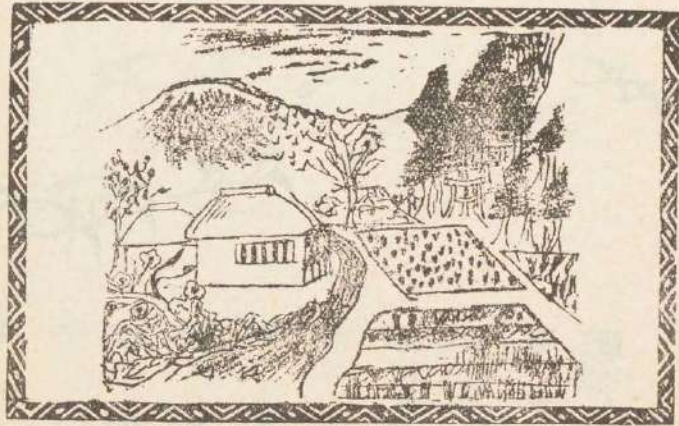


雁が
禪に
並んで
雁が
歸る
雁が
歸る
雁が
歸る
雁が
歸る

歸る雁

野口雨情





自由畫「冬」(賞)
和歌山市内町東小學校第五 岡本 澤枝

童謡 野口雨情選

たき火

仙臺市北目 嶋 木 碧
町通一九

あられがさむい

たき火がけむい

木藪かがさり

躰の小母さん

たき火たいてあたる

兎の電報

徳島縣勝浦 岸 本 爽
郡千代枝

ヤッコラサ〜

餅搗いた

兎の電報が 今着いた

「モチツキ タノム」と

書いてあつた

長閑

群馬縣勢多 青柳 花明
郡粕川村

雀の影が 障子に映る

一羽二羽三羽
豆蔵砲打たうか

酸漿提灯

東京小石川 三浦美都夫
江戸川町八

酸漿畑も 日が暮れた

赤い酸漿ぶらぶら

裏の街道は 砂利街道

酸漿提灯 つけてつた

木兎さん

神戸市港川 宇野 秀臣
町八ノ四二

森の中の木兎さん

鼈甲の縁の眼鏡かけて

お月様と話してた

雪

長野縣師範 藤綱 宗義
學校寄宿舎

あなたは 雪の

旅行話を聞いたかね

それは〜面白

旅行話を聞いたかね

雪渡り

東京小石川小日 神谷 桃十
向道町二ノ二三

茶畑越せば 庄屋の畑

床屋の畑

渡つて通らう

橋に乗つて通らう

南天坊主

福井縣敦賀 宮本 重雄
港入和町

南天坊主 赤坊主

のつべら坊の 立ち坊主

雪が降つて 凍えるな

冬が来て

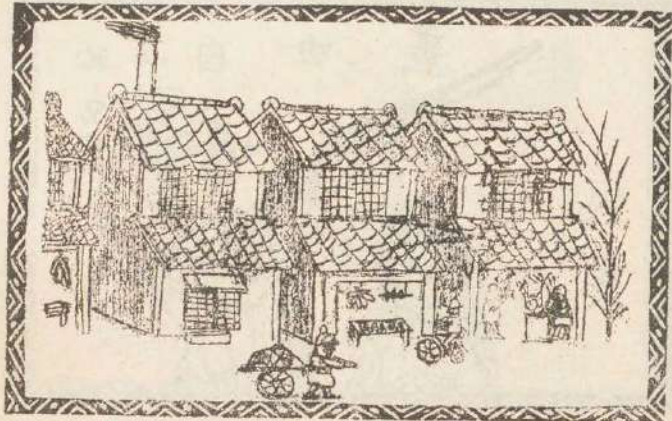
東京京橋區明石 秋山 秋露
町立教學院内

紅葉つば 子葉つば

寒い風に吹かれて

寒い風に吹かれて

庭ん中へ落ちた



自由畫「暮/町」(賞)
長野縣上田小學校第四 龜井 宗夫

櫛

千葉縣印旛 粟飯原 光市
郡栗富村

赤い櫛の 花嫁さん

いつ頃 お里へ 花嫁さん

叔母さん 母さん

待つてませう

にはごり

東京牛込區 寺田淳一郎
中町一三

くだかけ にはとり

日が ほかり

一べん羽ばたきや 霜が解け

二度目にや 蜘蛛が首を出す

夕焼

群馬縣佐波 島山 彪
郡剛志村

チンチロ目白

夕焼 赤いよ

赤い 紅買はうか

赤い紅買つて

わが兒に持たしよ



自由畫「松ノ兄サレ」
名古屋市中區南伊勢町 有本サナヘ

笹舟

静岡縣師範 柴田 秀二
學校寄宿舎

お池の中の 笹舟 小舟

一隻 二隻 三隻
竝んでゆれた

鳩

盛岡市上 川村 貞夫
田銀町五

「寒くなつたがお變りないかし」と

鳩はつはは 仲よしの

雀にお手紙書きました

小蟲

茨城縣筑波 上野 行夫
郡作岡村

葉っぱが一つ 落ちて来た

小蟲が一びき ついてゐた

小蟲はなんにも知らなくて

そつち こつち
眺めつた

選眼

和歌山市外 中村 壽治
根取一四

近眼の小父さん

出眼 出眼さん

パチクリ／＼

出眼 出眼さん

お日様

京都市吉田 渡邊 昌夫
中大路町四

お日様 赤いな

どうして赤い

そんなこつた 知らぬ

粉雪

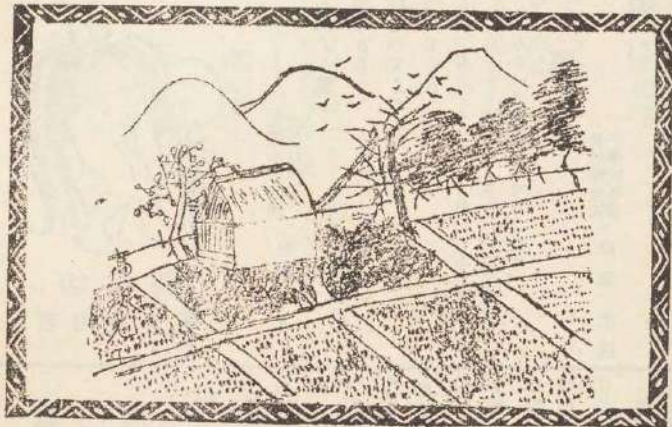
北海道札幌區 相川 正義
南四ノ西十一

さら／＼降るのは

粉雪よ

母さん鬼に吐られて

子鬼お目には鼻赤だよ



自由畫「冬」
和歌山内町東小學校第五 高塚 光子

王様の馬

横浜市西口部 住吉 亮
池之坂九二三

白のお馬

お首を振れば

白波が ちやぶく

銀の鈴 ちやらく

王様のお馬

立派なお馬

つくしんぼう

東京牛込區宮久 和田 篤憲
町百八番地

つくつくしんぼう

つくつくしんぼう

春が来たから野に出る

鶯はいて野に出る

小鳥が啼くから野に出る

袴はいて

野に出る

小鳥

長野縣 矢島みさを

おらが家の脊戸山さ

赤い小鳥が巢をくつた

おらが家の脊戸山さ

はぐれ小鳥が巢をくつた

やさしいも

静岡縣東草深 賤機多味男
町三ノ九

角の芋屋で 芋買って

袂に入れたら落つことした

芋屋のお母さん

あつち向いて

芋賣つた錢持つて

フンと言つた

馬

名古屋市長區 恒川 北斗
車道東町一九

馬はしよほぬれ 雨が降る

どーよ どーよと

悲しかり

歩くが出来ずに悲しかり



詩年幼
選水牧山若

雲 (賞)

久留米市島飼
小學校四年 野瀬トメノ

あれ〜雲が
向うから

はしつてこちらへ
やつてくる

評、なんとも云へなく佳い。あれ〜雲が
向うから走つてこちらへやつて来る。よ
みかへすだけよくなる。(牧水)

寒い日

長野縣豊岡
小學校五年 和氣 治近

寒々々々

降る雪に
あるがすは

見えす

評、これも兼叙だ、雪の雲のうたは女の歌
だが、これは全くぶつさらばうな男の歌
だ、感心々々。(牧水)

木の葉

(不明) 八木 スエ

かしのかしの
かしのは

かぜといつしよに
とんでるた

どこまで行くのか
かしのは

評、くる〜まはつておにはのいけにおち
ようとしてなか〜おちない、むかうの
やまのやまかけのけやきのそばまでまゐ
ります。(牧水)

蜘蛛の子

(不明) 後志なをし

くものこくものこ

なになつてるの

おなやすいたら

はへをあけよか
とんほをあけよか

綴方

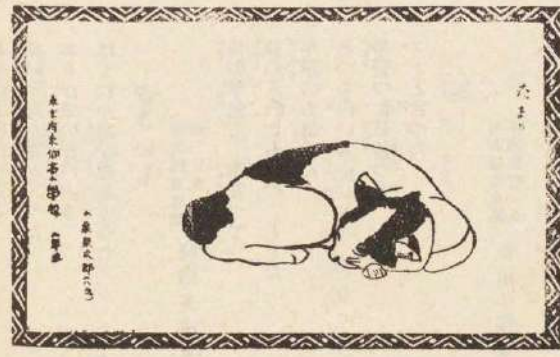
編輯部選

家から宮島まで(賞)

前島高等師範學
校附小一節三年 兒 玉 剛

朝四時に目をさしました。遠足の用
意をして家を出て流川の所まで行つて、
いくら待つて居ても電車が来ないので、
つまらんなあと思つて八丁堀まで歩いて
行きました。そして待つて居ると向うか
ら高等師範の生徒が二人來たので見ると
三部三年の渡邊君と田中君でした。町は
まだひつそりとしてねむつて居ました。
今度、又一人來たので見ると、つばをぶ
つとはいたので、藤本初夫君はつばをは
くくせがあるので、すぐに藤本君だとい
ふ事がわかりました。それで
「おい藤造。」と藤本君のしこ名を呼ぶと
「おいこだん。」と藤本君が僕のしこ名を
言ひました。藤本君が又

「紙屋町まで歩かうや。」と言つたので
「お。」と僕が言ひました。
二人は一生懸命にはしつて紙屋町まで



自由畫「たまのしやせい」
東京府東御小學校五年二 小栗安太郎

行きました。こしかけて待つて居ると菅
君と山根君が來ましたから、四人が一し
よに電車へ乗りました。

已要から汽車に乗つて行きました。廿
日市まで來て東を見ると白みかけて居ま
した。僕は初め立つて居ましたが、洋服
を着たをぢさんにこしをかけさしてもら
ひました。山根君のおかあさん、山根君
も僕のそばに居りました。僕が山根君に
「おい山根君、トンネルの所へ來たら、
堀君と井岡君の所へ行つて、頭をぶつて
來たらうや。」と言ふと、山根君のをばさ
んが
「トンネルの所へ來ても、人の頭をぶつ
たりするものではないよ。」と言はれたの
で僕はお聞きになつたのだなと思つて、
もうあゝいふ事はすまいと思ひました。
それから宮島の驛に着きました。

今朝

福井縣大飯郡高
濱小學校高一年 岡見謹一郎



自由畫「母のよなべ」
前井縣高濱小學校高一年 胡間 六郎
福井縣大飯郡高濱小學校高一年 岡見謹一郎 (七九)

だまつてにけると
すのいときつてしまふぞ
評、おまこはい〜(牧水)

つばき
静岡縣揚原 若山ミサキ
村香山 (七歳)

つばきつばき おにはのつばき
おかあさんやとうさんが
つばきがさいたとよろこんだ
ちかくのお山につばきがさいた
やまのつばきをとつてこよ

雪

山梨縣上九一色尋 土橋 郁子
常高等小學校尋五

雪が上つた
キラ〜と。
東の山は
白い笠かぶり
十里も近くへとんで来た。
立ち上る煙が
はつきり見える。

風

千葉縣東金小 小川 敬子

ひゅう〜と〜
はうらかぜふいた
おほさむこさむ
風の歌 歌はう

やくばのやなぎ

長野縣永明 小川 代吉
小學校尋四

風にふかれてやなぎがこつち
かぜがやんだらあつちへおきた
ほそい木の葉がいつでもをどる。

水仙

久留米市島飼 緒方 久子
小學校四年

咲いた咲いた水仙が
空を見あげてさいてゐる
さいたさいた水仙よ
どうしておまへはそのやうに
とほい空をみつめるぞ

風

茨城縣若柳 相澤 勘吾
尋常小學校

風がふいてきた
びゅう〜と。

ゐると、音はビタリとやんだ。少らくす
ると又ド、ン〜。僕は仕方がないので
横に寝てゐられる祖母をよんだが、ねほ
助の祖母はなが〜起きられない。相
變らず白河夜舟でゲーゲーと寝てゐられ
る。僕はしんきくさくなつたので今度は
大きな聲で「お祖母ちゃん〜」と、二三
度よぶと、「オー」と、ときやうな聲を出
して四方をきよろ〜見まはしてゐられ
る。「表に誰か来てゐられるで」と僕が言
ふと表では又ドンドン〜。祖母は又、
「へ〜と、おかしな聲を出して、どう〜
出て行かれた。……少し早いと思ひま
したけれど、米をあらはんなりませんの
で」母の聲がする。母は昨夜親類へ都合
で、とまりに行かれたのであつた。……

はち

長野縣永明 矢崎 かづ子
小學校尋四

私かせきへ入ると、みんながさわいで
上の方をのけてゐました。私も上の方を

たがなにもないから、おかしいとおもつ
てよく見ると、大きなはちが一びきブン
ブンやつてゐました。みんなはどうかし
てそうつと出さうと思つて、シイシイとい
ひました。そのくせまでもあけずに、
あつちへいつたり、こつちへにけたり、は
ちがあたまの上へでもくるとみんなせき
のしたへころがつて、はちの上へゆくま
でだまつてしまひました。そして上へゆ
くとまたさわぎだしました。そのうちに
一人がぞうきんをもつてきてなけつけれ
と、外の人までさわいでなけつけました
そのうちに小さい穴からはちが出てしま
ひました。私もホツト安心しました。

春をまつて

千葉縣印旛郡 栗飯原トミ子
彌富村七曲 (十五)

私どもは先日まで佐倉町に住んで居ま
したけれども、お父様のおつとめの御都
合で、二里ばかりはなれた當地へ移轉し
ました。あたりは管轄家です。

萬神山といふ小高い丘に古松が蒼蒼の襟
に聳えてゐます。丘下の田から鳥が飛び
たち、さうつと竝んでゐる稻ぶらに夕日
がさして、萬神山がだんだん黒つんでゆ
く頃の美しさは何とも言へません。
川向うの里で櫻が咲いて、うす霞が棚
引く頃はもつともつと美しいさうです。
町に居た時の様に、にぎやかなことは
ちつともありませんけれども、春になつ
たらたんほほやすみれが咲くでせう。き
れいなつくしも揃めませう。

取付

廣應義塾幼 松下 春三
稚舎六年

英語の先生の所へ行つた歸り、僕は見
城君と二人で慶應前の停留所あたりを歩
るいて來ると、大勢の人がどん〜學校
の正門の方へかけて行く。何かさつぱり
わからない。みんなは火事だ火事だとさ
わぐ。しかし火事ではなささうだ。僕は

ふと前の方を見ると丁度、學校の正門の
わきにある貯蔵銀行の前は人で一ぱいだ
「アツ銀行が取付だッ」
かう二人は叫ぶと同時に大勢の人と一し
よにとん〜かけ出した。行つて見ると
大變なさわぎだ。どら聲でどなる男の人
や、かなきり聲で叫ぶ女の人もどが大勢
で小さな入口から入らうとして居た。見
城君はひとり面白がつて居た。

鮎

大商市北區西條 頼 野 清
ヶ枝町八四八

今日で楽しいお正月は終ひなのだ。今
日は一つうんと遊ぼうと思ひながら、裏
の物置場に出て見ると、水がめがおいて
あるのに気がついた。それを見て僕は、
「はつ」と思ひながらそのふたをとつて見
ると、中の水はどんよりにごつて、五六
日迄びん〜と勢よくおよぎまはつてゐ
た鮎はにこりきつた水の上へボカンと浮
いてゐた。僕はあ〜しまった。かうなる

どこからふいてきた

この風は。

どこまでふいて行く

この風は。

お経

千葉縣銚子町 明石きよ子
今宮目出度町

横横横ちよのお寺さん

小坊主お経を讀んでゐた

みんな、ぐにやぐにや、まんだらや

まぐろが食ひたい

ぶり食ひたい

木の葉の母さん

四谷區愛 梅田 龍子
住町七六

木の葉よ 木の葉

もう皆んなちつてしまつて

木の葉の母さん

毎日くゝないてるる

子供よ子供とさがしてる

かはいさうな木の葉の母さん

九くわん鳥

東京市本郷 高田 英之
小學校一年

くろいからだと

赤いくちばし

それにくちまね

九くわん鳥

坊があそびの

よい仲間

餅つき

大阪市東區 大塚 好之
谷町三四七

ほつてんく

隣のをちさん

縛はち巻

お弟子と一つしよ

ほつてんく

▼佳作 △けしぼうす(久留米 上野ハルエ)
△からす(長野 竹村常利) △星(愛知津野
廣) △こびきさん(千葉 石橋光子) △雪(大
分 田中健次)(以下通信欄へ續く)

だらうと思つて、元日の朝にかめの中を
のぞいて見ると、まだ勢よく餅はおよぎ
まはつてゐたので、つい「まだ水をかへ
んでも大丈夫だ。」と思ひながらふたをし
てほつてをいた。それが今日は一匹も残
らず死んでゐる。あの時に水をかへてや
ればよかつたのに、とりかへしのつかぬ
事をした。此の餅は昨年九月に、お父
さんと僕とが餅釣に行つて釣つて來た餅
で、此の水かめへ入れて今日まで養つて
きたのだが、つい一べん水をかへなかつ
たばつかりに、とうく餅は死んでしま
つたのだ。

現像

東京青山師範 出淵 國保
附屬尋常六年

赤い電燈がせまい室をばいにてらし
てゐる。さつきから現像してゐるのにま
だ二十分たないのかしらと思ひながら
フィルムを上げたたり下げたりして薬品に
つけた。手はだるくなつてくる。姉さん

がら見てゐた。僕は「なあにこんな小ほ
けんだ」と高く差上げた。をちさんの劍
が朝日にかややいてゐた。

年トツタオ百姓

福松市傳馬 鈴木ふみ子
町本瀬の家

私は久しぶりで野外へ散歩に出た。
此の前來た時にふさふさと質のつてゐ
た稲はなくなつて、今はきりかぶばかり
になつて居る。たゞ青々として居るのは
向の方の大根畑ばかりだ。右の方のあ
げ道すたひに一人のおぢいさんのお百姓
が、くわをかついで大根畑から出て來た
どこへ行くのかしらと見て居ると、私の
すぐ左の方にながれて居る小川の方へあ
るいて來た。なほ見つめて居ると、川へ手
を入れてくわや自分のしわだらけな手を
あらつて居る。しばらくして川向うの大
きな、みかんの木の家の家から男の人が
出て來て、そのおぢいさんと笑がほで話
をして居た。おぢいさんは青いもめの

が「二十分」と大きな聲でいつた。僕は鳥
がかごから出された様にうれしかつたと
同時に失敗したかなと思ふ心配がわき出
した。水にあらひ薬品につけて仕上をし
た。電氣の方に向つてすかして見ると今
までにない成功の成功だ成功だ」と僕は
獨言をいつた。となりの室から姉さんが
「どーれ」とさもねむたそうにからかみを
開けて顔を出した。「そーら」と僕が鼻に
つきつけた。「あ、くさい」といつて鼻を
つまんだ。何んだか急に、自分がえらく
なつた様な氣持がした。

鰻のつれた時

東京府千住第 諏訪 良博
一小學校尋常六

ぐんぐん糸を引くので喜んで引上げた
と大きな鰻が針にくつゝいて勢よく白い
腹を見せながらはねてゐた。ふいに上の
堤から大きな聲で「やあ大きい奴がつけ
たね」と誰かがとなつた。上を見上げると
監視動の看守のをちさんが下を笑ひな

手ぬぐひで手をふいて、又くわをかつい
で、其の家へ入つて行つた。

教室のまごから

愛知縣一宮第 田中 銳二
四小學校尋常五

植物園で二匹のはとりが、友だちの
やうに仲よくならんで、えさをひろつて
ゐる。一羽が「ココココ」とないてゆく
すぐあとから「ココココ」とないて行く。
そのうちに僕の教室のまごの方へ近づい
て來た。雀がとびたつと、にはとりはび
つくりして「ココ、ム」とないた。どこか
ら小さな犬が入つてきて、松の木を一
まはりすると、門の外へ行つた。それを
見たにはとりはつき山へかけ上つた。そ
れからすがたが見えなかつた。

▼佳作 △齒が痛い(鳥取森村仁次) △龍爪の
初雪(静岡津井政雄) △夕の火車(長野矢島ふ
み) △思案(千葉田内小敏) △學級競走(神戸高
橋久藏) △飛行機(愛知櫻井光男) △かるた(熊
本杉本秀雄) △新し(以下通信欄へつゞく) △家
の犬(東京阿都守忠)(以下通信欄へつゞく)



信通

自由畫の評

山本鼎

▲なるべく寫生をおしなさい。で、なければ、實際に見た事のある物をおかきなさい。

▲鉛筆畫でも、毛筆畫でも、水彩畫でも、油畫でも、めい／＼の好きなもので描くのがいいのですが、雑誌へ版にして出す事の出来る畫は、いつも濃い鉛筆が墨かで鮮明と書いてある畫に限るのです。はつきりした畫でない、雑誌の紙へ印刷するとぐちゃぐちゃになつちまうのです。

童話の選後に

野口雨情

昔さんは、なるだけ、讀む童話よりも唄ふ童話を作つて下さい。唄ふ童話には一番言葉

白いです。併し私は、岡本深枝さんの『冬』といふのが一番好きでした。野村綾子さんの良かつたが、ジंक版といふ版にはなりにくかつたので雑誌へのらないのです。▲京城の、岡功君の『青年』といふ畫も好きだつた。併し色鉛筆のために、雑誌へ版にして出す事が出来ない。

▲八木倍二郎君のもわるくない。併し、鉛筆の線が淡すぎるので寫真にとれない。▲堀内保雄君——君はなか／＼水彩畫がうまいです。あのコキウでどん／＼描きたまへ。自分の描かうとする物をよく見てね——木でも家でも雲でも丁度人間の姿や顔のやうにそれ／＼の姿や色や調子があるのですから。▲山中君の樹木はさういふ點に堀内君のより活き／＼描いて居ます。

▲自由畫 作 △お年こしの晩(東京 岡島正人) △朝(京都 堀井詳子) △ウツギ(東京 岡田四郎) △北門(京城 岡功) △餅つき(樺太 土橋ヌケ) △きしや(宮城 八木倍二郎) △會下山の家(神戸 宇野日出彦) △萬年筆(新潟 相馬其一) △人形ごっこ(朝鮮 小越富美子) △パンザイ(東京 長野英夫) △工場(東京 矢口秀治) △たこあげ(大阪 太田清子) △奥平君(京城 有吉喜一) △お父さん(神戸 山本美枝子) △讀み方の時間(神奈川 本田ユキ) △ジユンサ(同 澤田直正) △オモチヤの演説(東京 芥川英一) △おにごっこ(東京 猪飼孝子) △お友がなくて(愛媛 池本キミエ) △モチャキ(京都 山本良友) △家(福岡 杉本秀雄) △お父さん(兵庫 高橋久藏) △鳥居(群馬 山本賀雄) △お化粧(京城 北村邦子) △冬(和歌山 濱田千代) △沖繩の海(沖縄 山口正三郎) ▲幼年時佳作 △番降り(兵庫 小原基治) △人形(金澤 岡本富正) △おつめ(京都 中塚よし) △雪どけの朝(宇都宮 武内とし子) △時計さん(大阪 頼野清) △おるすけ(東京 日向桃子) △夜が明けぬ(神奈川 小澤たか子) △にはとり(神奈川 程塚吉三) △キユウセイ(長崎 津吉アヤ子) △めくら(山口 津吉菊枝) △避雷針(大阪 三宅義生) △天(神戸 高橋久藏) △ぼうづき(長崎 津吉菊枝) △雪(不明 藤原富子) △雀(愛知 伊藤麗一) △雨(たれ) △京(堀井定子) △すま(千葉 山口ふみ子) △かへる(千葉 東千代子)

の調子が大切で、五音調といへば、三と二の五音調です。同じ五音調でも、散る調といへば二と三の五音調になります。これはその一例にすぎませんが、三と二の五音調と、二と三の五音調とでは唄ふ調子の上に大變な違ひがあります。今回掲載の出来なかつた佳作中の重なるものは、大寒小寒(太田九二藏) 二月の朝(長野昌水) 獅子舞(家安業二芽) 日暮(望月保治) さげ(小塚瀧) 椿と蝶(三木胡桃) アラス(高橋十成) 秋の舟(木浦榮雄) 小鳥(高波英) 虹(賤機秀男) 柿(齋三六) お月さん(若山迷半) 雨(頼野清) 時雨(市村兼一) 雲雀(小山ゆめ男) 鈴の音(瀧田きよ子) 雨の聲(狩野繪太郎) めんない鳥(大塚魚城) 机の上(高梨ひろ子) 火車(林夏笛) 小猿(千葉逸郎) ぢやんけん(藤井正夫) 月と星(高島保治郎) 雨(星菊) 魚(成瀬孤城) 鼻(島橋庚志) 河童(森田克巳) 黒板ぶき(鈴江清) りんご(白江好郎) あかたかきもの(石橋正治) 汽車(田中紅) カルメの女王(冬木園太郎) 地蔵さん(稗方敏郎) 寒い所(松川香) 馬(小川五郎) 柳(本間資高) ふくら(木谷末次郎) 除夜(夜間博) パラの冬(仙臺愛子) 片手の人形(茂木健二) 風(江口紅詩郎) 鶴(林董) つばめ(海津豊次) 荷(鈴木章弘) 人形(増田恒治) 火玉(春海壽) 白いお月さん(白石

一風) 新巻(中野野風) 米刈き(島田田一) 夜のお宿(藤島義夫) ムッ星(田村盛) 月と風(日比野春夫) お神樂(塙澤人) 鶴(瀬戸愛船) 大風(小川五郎) 光の子(井深清彦) 見念佛(山本正) 乾し物(松井淡翠) 羊とクローバ(横尾緑) 電信柱(林しげる) 小人の鈴(奥津聖秋) ゆめの橋(柳田興生) てんととんと寺田淳一郎) 日暮(小山水紅) 雀(小原基治) かめめ新井信彌) 鈴木一誠) 風(小山一苗) げ山(川村喜美) かまとお化(追順) 親馬仔馬(高橋正巳) やかん(安野岩次郎) 金の馬車(花房妙子) 既(石川東吾) 風(村岡長逸) 母と兒(柳田よし子) などで、それから、天江登英草、高井宮、鈴木友花、坂田露香、武田多喜子、佐藤勝熊、渡邊スアコ、美町澄夫、塚本篤雄、大西貞雄、山美雄、支常と子さんの進の作をだせなかつたのを遺憾に思ひます。

募集童話評

選者

今月も佳作が深山ありましたが、重立つたものは次の諸作でした。千葉氏(暖い園より) 三木氏(殺生禁断の池) 八木氏(鼻の聲) 作間氏(夢に歩いた話) 高井氏(悪意地を張る男) 木谷氏(コスモスの死) 日比野氏(二つの町) 栗

▲金の船(友) 東京 本谷末次郎君 ○東京 比企恒子君 ○東京 塚本篤雄君 ○臺灣 重松篤子君 ○神戸 高橋久藏君 ○神戸 鈴木八十 八君 ○北海道 中村太郎君 ○東京 關余子君 ○鳥取 中野和雄君 ○鹿児島 木下一郎君 ○大阪 溝口通男君 ○大阪 遊禮興君 ○東京 小曾木武雄君 ○新潟 佐々木守輝君 ○大阪 頼野清君 ○東京 小山喜美代君 ○東京 島野奎三君 ○京都 新谷義晴君 ○福戸 滝川長治君 ○大阪 北中巖藤君 ○東京 隈部壽子君 ○福島 佐藤貞吾君 ○臺灣 並川定雄君 ○東京 高井宮君 ○東京 南浩光君 ○千葉 明石きよ子君 ○熊本 竹下一福君 ○長岡 赤澤芳榮君 ○神戸 中島實子君 ○福岡 大里誠雄君 ○山梨 小野富貴子君 ○愛知 柳田興生君 ○麻布 米山清次郎君 ○東京 猪飼孝子君 ○東京 古澤武夫君 ○東京 渡邊廣子君 ○富山 藻谷小一郎君

飯原氏(マツ木)荒川氏(開運)賤機氏の諸作。の「不思議の徳利」が優れておました。中でも近江谷氏(玉ちやん)矢島氏(シリアンの蒼海)北川さんの「粉袋を吞負ふ」は題材が實に面白林氏(お月様の話)松平氏(星で書かれた字)久保田氏(春が来る迄)古川氏(炬燵の火岩見氏(空物語)神谷氏(エミ)松井氏(芋堀り)小澤氏(お月様とお星様)白江氏(マルン)北川徳次郎氏(粉袋を吞負ふ)さて、それ等の諸作の中では白江さんの「マルン」と千葉さんの「寝い國より」と北川さん

善い綴方・悪い綴方 選者

◆金の船の合本(第三製出来)

第一輯(第一巻第一號より第二巻第四號まで六冊合本) 定價壹圓五拾錢
第二輯(第二巻第五號より第二巻第十號まで六冊合本) 定價壹圓八拾五錢

◆金の船誌友募集

なほに書かうとしないのですか。見たこと、どうにも感心できません。こんどは、とくに感じたことを、ありのままにすなほに書かう かういふ悪い傾向のものがたくさんありまじしないのですか。たくさん集つた中でも、た「取付」船「現像」艘のつれた時「年とすなほに書いてあるのは、わづかに「家からつたお百姓」ともかなりよく書けている宮島まで「今朝」「ばち」春を待てるから「取付」や「現像」などは題材もあなものです。「今朝」などは、どうかすると新らしくて面白いのですが、やつぱりきどつわるだつしやになりさうですから、きをつけて言葉や、いや言葉が多いので、そんなものなければなりません。その他のものは、いや はみんなけつてしまひました。しかしこれな首書や、まどつた首書がたくさんあるのではまだしもい方がです。

◆大懸賞讀者文藝募集

「金の船」七月號は兼て豫告の通り「讀者文藝號」といたしますから、一般讀者の皆さんから童話、童謡、綴方、幼年詩、自由畫を懸賞で募集いたします。題は皆さんの自由でよろしいのですから大に奮つて投稿して下さい。投稿は四月二十日午後六時に締切ります。投稿には必ず封筒の上へも原稿へも「大懸賞」と書いて金の船編輯所宛に送つて下さい。選は童話は野口雨情先生、幼年詩は若山牧水先生、自由畫は山本鼎先生、その他は凡て編輯部でいたします。

- ◆童話 (廿行以内) 一等賞金六拾圓 二等賞金貳拾圓 三等賞金拾圓
- ◆童謡 (二十行以内) 一等賞金貳拾圓 二等賞金拾圓 三等賞金拾圓
- ◆綴方 (三十行以内) 一等賞金貳拾圓 二等賞金拾圓 三等賞金拾圓
- ◆幼年詩 (二十行以内) 一等賞金貳拾圓 二等賞金拾圓 三等賞金拾圓
- ◆自由畫 (畫用紙へはつ) 一等賞金貳拾圓 二等賞金拾圓 三等賞金拾圓

正訂

前月號の豫告には讀者文藝號を「六月號」とし、締切りを三月二十五日としましたが讀者諸君から締切りを延してくれといふ御希望がありまして、發表を「七月號」にし、締切りを四月二十日に延期しました。尚、童話の原稿字詰は前號に十行廿字詰としてありますが、一枚分にして數へれば二十行廿字詰の事ですから間違へないやうに願ひます。

新しく出た本

▲別後 (野口雨情先生著) 野口先生の民話傑作集で、尙文堂の抒情詩名作叢書の第三篇です。最近の作は勿論、以前發表された傑作は凡てこの中に集められてゐます。先生は童話の大家であるばかりでなく、民話作家として並ぶ者のない作家です。民話と童話が見弟の様なものであつて見れば童話を作る人の是非一讀すべき本です。(袖珍箱入美本、神田區南神保町尙文堂發行、定價金九十錢)
▲ガリバ旅行記 (岡本歸一先生畫、平田亮木氏譯) 富山房の家庭文庫の續篇として例の通り立派な本となつて出ました。ガリバの小人國、大人國奇談を全譯して岡本先生の美しい畫を挿入してあります。是迄これに似た本は澤山出てありますが、是程完全なものは見當りません。平田氏は譯文の大家です。それに岡本先生の挿畫が比へ物のない立派な事は言ふまでもありません。(菊判四二頁、神田富山房發行、定價金參圓八拾錢)
▲鐵の御園 (長田秀雄先生著) 「金の船」で大好評だつた長田先生の「鐵の御園」をばじら「お月様の話」雀の夢「聖澤寺の出来」等とあつて澤山出てあります。岡本先生の美しい挿畫が澤山入つてゐて、氣持のよい上品なもので面白く童話集です。(四六判二〇六頁半、津久戸町家隆讀物刊行會發行、金壹圓廿錢)
▲家動物園 (池田永治氏畫) 「金の船」二月號に廣告が出てありますが中々面白い、思つきの物です。六枚の懸軸になつてゐて、一枚々々澤山の動物の畫がかいてあります。子供達の裝飾ともなり子供に動物の智識を興へるもので、本當に簡便に家庭動物園の役目を果すものです。(神田錦町象文館、特價金八圓送料五十錢、一幅賣送料共壹圓五十錢)
▲人魚のねがひ (蘆谷薫村氏著) 蘆谷さんの最近の童話の中で、いふものはかなり集めたものです。たゞ面白いお話といふ事だけでなく、そのお話から色々な美しい教訓を興へるものが此の本の主眼です。(四六判二四八頁、東京橋尾張町警報社書店發行、金壹圓五十錢)
▲オトキウ女王 (蘆谷小波氏著) 外國の本を見る様に美しい本です。牛若丸ひよつ子「運動會」「舌切雀」の四つの話を歌にして、それに一々畫本風に綺麗な畫を添へてあります。幼い人達のお友達にもつて、この本です。(日本橋丸善株式會社發行、定價金七十五錢)

金の船消息

▼第二回「金の船音譜」は本居長世先生作曲「夜の舟」象の鼻「九官鳥」と中山晋平先生作曲「お山の鳥」を吹込んで日本蓄音器商會から近く發賣いたします。

▼「金の船」童謡曲集は今まで「金の船」に載った本居長世先生の作曲を集めて東京神田小川町敬文館から發刊されます。

▼「金の船」童謡ガイドは本月初の附録として出しましたが今後も引續き春と秋の特別號に面白いガイドを添へることもしますから大切にためて置いて下さい。

▼野口雨情先生の民話集「別後」は神田南神保町向交堂から出版されました。大阪毎日新聞の新年號に發表した有名な「子安貝」の唄には本居長世先生の作曲がついて載つて居ります。初版に賣切れて目下再版中です。

▼童謡童話其他懸賞募集は一般の讀者諸君から別頁記載の通り懸賞募集いたします。締切は四月二十日です。締切に後れないやうに、たくさん投稿して下さい。

▼第五回「金の船」童謡會は二月十三日午後一時から四谷舟町都築病院の樓上に開かれました。童謡を作らない方でも童謡に興味のある方ならどなたでも出席を歓迎します。照會は四谷區舟町三番築世氏宛に願ひます。



少年創作募集

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

自由畫、幼年詩、綴方、何れも題は何でもかまいません。みなさんの見たこと感じたことな、みなさんの好きなやうに描いたり、作ったりして出して下さい。原稿には必ず學校と學年、または住所と年齢を書いて下さい。よく出来たものには賞品をさしあげます。特にすぐれてよくできたものには「金の船」賞をさしあげます。

懸賞創作募集

童話……野口雨情先生選
童話……二十字詰二百行以内、童話は二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として誌上に發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓童話には五圓づつ賞金として呈します。
(原稿は「金の船編輯所」へ送って下さい)
東京市外田端三五一番地
金の船編輯所

繪雜誌四月號の歌

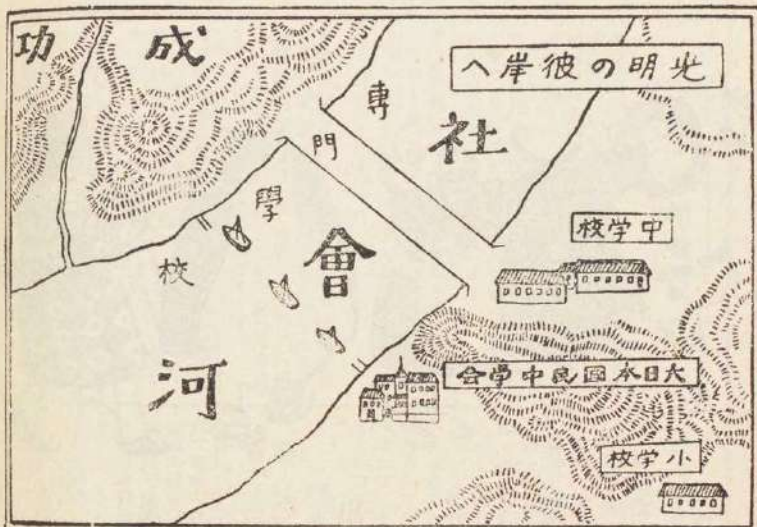
出た 出た 御本が
好きな 好きな 大好きな
日本の子供」とナカヨシ
出た 出た 御本が
綺麗な 綺麗な 面白い
日本の子供」とナカヨシ
早く買って読みましょ
皆で一緒に読みましょ
日本の子供」とナカヨシ

(本誌に限り三十五錢)

定價一冊三十錢 送料壹錢
定額分三冊(送料共)九十錢
半年分六冊(送料共)壹圓零錢
壹ケ年分十二冊(送料共)三圓零錢
但し新年號四月號九月號は特別號で廿五錢です。御註文の際は、この號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお持ち込み下さい。
振替口座東京〇五七七番

廣告料は御照會次第お答へいたします
大正十年三月五日印刷納本(毎月一回)
大正十年四月一日發行(一日發行)
編輯人 齋藤 在 次郎
發行所 東京市神田區向交堂三番地
印刷所 東京市小石川大橋八百八番地 光吉
東京市小石川大橋八百八番地 光吉
東京市神田區向交堂三番地 光吉
東京市神田區向交堂三番地 光吉
東京市神田區向交堂三番地 光吉

五料送錢五拾冊一はシヨカナ
錢拾九共料送分年々半册六
錢拾七圓壹共料送分年一册二十
段九京東所行發
社ノツノンキ
番二七五〇三京東替振



橋無くとも舟有り!!
 中學校へ行けなくても落膽する
 必要は無い

護国社の創立、今日の社会に飛び出して成功しようとする人にとって何よりも必要なのは中等教育の普及である。と云つて、いろいろの事情で中學校へ行けない人はどうしたよいか、それはたゞ一つの良法がある、ほかでもない本會へ入會して本會の理想的中等教育の特色を今更述べる必要はあるまい。

長尾崎 行雄

顧問並ニ監

遠藤博士 山内博士
 井上博士 浮田博士
 新津博士 岡田前文相
 三宅博士

◎今が入會の絶好期!! 見本つき規則書は無料で上げます。

東京神田 駿河臺 **大日本國民中學會**
 無轉東京四二〇〇番電話神田 三〇〇三番

尋常小學 自習讀本

東京京橋南紺屋町
 實業之日本社
 振替東京三二六番

東京高等師範學校 教諭 **玉井幸助先生著**

忽四版
 お子供達に是非本書を與へて下さる。一度讀ませたら必ず優等生となります。

□特色の書本□

東京高等師範學校 教諭 玉井幸助先生著
 やさしい先生のお側で手をもたれて教はるやうな漢字の書です。
 歴史や地理や動物植物や理科やその他色々の知識がひとりで得られます。總てカナがつけてありますから、誰でも讀めない字が一つもありません。上欄にはむづかしい言葉の意味を下等に説明してあります。

内容
 日本附國の思ひ出、井伊直弼の決闘、ヘアー君とラビッド君、魔法の帽子、寶宮の晩、やさしい心、カナリヤ、鎌倉討入、無人島漂流記、サハラ沙漠探險記、獅子の發明、様々な家、パベルの塔、ローマ懐古、其他故事

□ 定價 壹圓三十錢 □
 □ 郵稅 八錢 菊判 □

親と子の智慧の泉

金子洋文先生著
 三版 送料 八錢



大正八年十月十六日 大正十年三月五日刊 第三卷第四號 第一回二日發行

學校のお用意は三越

新學年が始ります、御用意は出來ましたか、學校のお道具を始め帽子も靴も鞆も袴も、其他の必需品も残らず三越に取揃へてあります

◆ 三越の四月 ◆
 寄裂見切反物賣出し (二日)
 新製洋傘陳列會 (二日)
 五月人形陳列會 (十日)
 銘仙新柄陳列 (十五日)
 ……定休日……十日…二十五日…



町河駿京東
 店服吳越三

東京 キンノツノ社 發行

(本誌に限り定價參拾五錢)